

藤島城跡

第4次発掘調査報告書

1992

山形県教育委員会

ふじ しま
藤 島 城 跡
第4次発掘調査報告書

平成4年3月

山形県教育委員会

序

本書は、平成3年度に山形県教育委員会が発掘調査を実施した藤島城跡第4次調査の成果をまとめたものです。

藤島城跡は山形県の北西部に位置する藤島町にあります。藤島町は山形県農業試験所庄内支場や県立庄内農業高等学校があり、“庄内米”の中核をなしています。歴史的にも中世城館をはじめ縄文時代に逆上るまで数多くの遺跡が確認されています。調査では、本丸堀跡の検出によりこれまで不明な点の多かった藤島城の一端を知ることができました。出土した陶磁器類や木製品は、当時の生活のみならず現代にも通用する流通経済に至るまで幅広い資料を提示しています。

埋蔵文化財は私たちの祖先が長い歴史の中で創造し育んできた貴重な国民的財産であり、一度壊してしまえば二度と元に戻らないものです。調査により明らかにされた遺跡は過去の生活の有様を彷彿と再現してくれるものです。祖先の歴史を学ぶとともに愛護し子孫へと保存し伝えていくことが、現代に生きる私たちに課せられた重要な責務といえるでしょう。

山形県教育委員会では、「心広くたくましい県民の育成」と地域文化の環境作りという立場から、今後とも県民福祉の向上を目的とした地域社会の整備と調整をはかりながら、埋蔵文化財の保護に努力を続けていく所存であります。

本書が埋蔵文化財に対する保護思想の普及もかねまして、皆様のご理解の一助となれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査においてご協力をいただいた地元の方々をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます。

平成4年3月

山形県教育委員会教育長 木場清耕

例　　言

1 本報告書は、山形県教育委員会が平成3年度に実施した「県立庄内農業高等学校校舎新築工事」に係る「藤島城跡」の第4次緊急発掘調査報告書である。

2 調査期間は、平成3年6月17日～同年10月4日の延べ70日間である。

3 調査については、県立庄内農業高等学校・藤島町教育委員会・庄内教育事務所の関係機関、並びに藤島町の方々から協力を得た。ここに記して感謝申し上げる。

4 調査体制は、下記の通りである。

調査主体 山形県教育委員会

調査担当 山形県埋蔵文化財緊急調査団

調査担当者 事務局長補佐 佐々木洋治(調査担当)

調査班長 佐藤 正俊

主任調査員 伊藤 邦弘

事務局事務局長 土門 紹穂

事務局長補佐 田苗健太郎(庶務担当)

庶務班長 野尻 健

主任事務員 新闇 紘子・賣間 秀男・永井 健郎・渋江 正義

5 本報告書の作成は、伊藤邦弘が担当し、挿図・図版の作成補助には、伊豆倉弘子・熊谷香代子・駒米弘子・佐藤恵子・多田美恵子・三浦美奈子があつた。本書の編集は、伊藤邦弘・安部 実が担当し、全体については、佐々木洋治が総括した。

6 出土遺物については、山形県教育委員会が一括保管している。

凡　　例

1 本書で使用した遺構の分類記号は下記の通りである。

S D : 堀跡・溝跡 S E : 井戸跡 S K : 土壙 S P : 小穴

2 本書の執筆基準は下記の通りである。

(1) 遺構全体図・遺構実測図中の方位は磁北を示している。

(2) グリッドの南北軸は磁北より34度東に傾いている。

(3) 遺構実測図は、1/40・1/50・1/60・1/150・1/250の縮図で採録した。

(4) 遺物実測図・拓影図・写真是、1/2・1/3・1/4・1/6で採録した。

(5) 土器・陶磁器類の断面実測に関しては、断面の右に外面、左に内面を表した。

(6) 遺物観察表・計測表中の()内の数値は、図上復元による推定値又は残存値を示している。

(7) 土層及び遺物の色調は、昭和45年度版農林水産省農林水産技術会議事務局監修の「新版標準土色帖」による。

(8) 陶磁器類の編年・分類は珠洲焼：吉岡康暢氏、越前焼：田中照久氏、瀬戸美濃焼：井上喜久男氏、青磁：亀井明徳氏、白磁：森田 勉氏、染付：小野正敏氏作成のものに拠った。

目 次

序

例言・凡例

I 調査の経緯	5 土壙	8	8 青磁	25
1 調査に至る経過	6 小口	8	9 白磁	25
2 調査の経緯	7 桂穴	8	10 染付	25
II 遺跡の立地と環境			11 金屬製品	28
1 地理的環境	IV 遺物		12 石製品	28
2 歴史的環境	1 遺物の分布	13	13 銀貨	28
III 遺構	2 頸壺器	13	14 木製品	28
1 遺構の分布	3 かわらけ	13		
2 距跡	4 瓦器	13	V まとめ	
3 井戸跡	5 珠陶系陶器	15	1 遺構について	35
4 溝跡	6 越前焼	19	2 遺物について	36
	7 湖戸塗	19		

表

表-1 出土陶磁器観察表(1).....31	表-4 出土上・石製品観察表.....33	表-7 出土銀貨一覧表	34
表-2 出土陶磁器観察表(2).....32	表-5 出土金属製品観察表.....33	表-8 出土遺物点数表	34
表-3 出土陶磁器観察表(3).....33	表-6 出土木製品観察表.....34	表-9 器種別遺物点数表	34

挿 図

第1図 連続位置図.....2	第9図 連構配図.....11	第17図 湖戸焼斜側図(2)	
第2図 調査区位置図.....3	第10図 頸壺器・かわらけ	青磁束側図(1).....23	
第3図 S E35・36井戸跡.....4	瓦器束側図.....14	第18図 青磁束側図(2).....24	
第4図 S E37・38井戸跡.....5	第11図 珠陶系陶器束側図(1).....16	第19図 白磁・染付束側図	
第5図 S E41・52井戸跡.....6	第12図 珠陶系陶器束側図(2).....17	26	
第6図 距跡・溝跡.....7	第13図 珠陶系陶器束側図(3).....18	金屬・土・石製品束側図	
第7図 S K14・15・18・26 27・30・31土壤.....9	第14図 越前焼束側図(1).....20	鉄貨拓影27	
第8図 S K32・33・34・39 42土壤.....10	第15図 越前焼束側図(2).....21	第21図 茶白・石鉢束側図	
	第16図 湖戸焼束側図(1).....22	28	
		第22図 木製品束側図(1).....29	
		第23図 木製品束側図(2)	30

図 版

図版1 青磁・白磁	図版7 S E35土層断面・S E35完掘状況	図版10 頸壺器・かわらけ・瓦器
図版2 染付	S E41土層断面・S E41・52完掘	図版11 珠陶系陶器(1)
図版3 調査区全景・調査風景	状況・S E52井戸枠検出状況	図版12 珠陶系陶器(2)
図版4 溝跡・トレンチ	S E37土層断面・S E38完掘状況	図版13 珠陶系陶器(3)
北側調査区連構検出状況	S E38土層断面・S E38完掘状況	図版14 珠陶系陶器(4)
西侧調査区連構検出状況	図版8 S D 3・4・5・6・7 検出状況	図版15 越前焼(1)
東側調査区連構検出状況	S D 5土層断面・S D 7土層断面	図版16 越前焼(2)
図版5 北側調査区完掘状況	S D 3・4・5・6・7 完掘状況	図版17 湖戸焼(1)
図版6 S D 1距離・S D 1内乱坑	図版9 S K16土層断面・S K18土層断面	図版18 湖戸焼(2)・白磁
S D 1内珠陶系陶器出土状況	S K22土層断面・S K26土層断面	図版19 金屬・土・石製品・鉄貨
S D 1内漆器出土状況	S K27土層断面・S K28土層断面	図版20 茶臼・石鉢
	S K39・31土層断面	図版21 木製品(1)
	S K32・33・34完掘状況	図版22 木製品(2)
	S K39土層断面・S K42土層断面	

I 調査の経緯

1 調査に至る経過

本遺跡は土塁・堀を含む八幡神社の周囲が藤島町の史跡に指定されているが、藤島城跡自体は、周辺宅地の一帯を覆う広がりを持つものと考えられる。中でも中心部の大半は県立庄内農業高等学校の敷地内に当たることから、学校の改築あるいは新築に伴い幾度かの調査が行われてきた遺跡である。第1次調査は、昭和54年に藤島川の河川改修に伴う外郭西側の緊急発掘調査が行われた。第2次調査は、平成元年度に二の丸と考えられる所に県立庄内農業高等学校の体育館が新築されることになり、前年度実施した試掘調査で得られた資料をもとに、2,415m²について5月から9月まで緊急発掘調査を行った。また同年6月から7月にかけて藤島城跡の本丸に想定されている所について、ガラス温室新築に係る第3次調査を行っている。調査面積は240m²である。これらの調査により、土塁、堀、建物跡等を検出するに至った。一方陶器類等の多量な遺物から14世紀中頃を上限に、15・16世紀に最盛期に向かえるであろう藤島城の一端が浮かび上がった。

平成3年度には、校舎改築が計画されたことから、関係機関と協議を重ねた結果、山形県教育委員会が主体となり緊急発掘調査を行う運びとなった。本調査は藤島城跡の第4次発掘調査である。

2 調査の経過

調査期間は平成3年6月17日から同年10月4日の延べ70日間である。調査対象面積は校舎新築部分の2,068m²である。調査区は新築される校舎の位置から、東・西・南・北の4調査区を設けた。グリッドの基準線は、新築される校舎の計画に基づき設定し、その南北線をY軸とした。そのため第2次・3次調査の際の基準線とは1度のずれが生じている。今次調査のY軸基準線は磁北から34度東へ傾く。グリッドの単位は5m×5mを1単位とした。調査区は庄内農業高等学校の旧校舎跡地であったため、表土中には、基礎用の礫をはじめ、コンクリート塊が混入していた。表土は、調査区の周間に設定したトレンチを掘り下げ、遺構までの層序を確認した後、重機械により除去し、産業廃棄物として処理した。次いで手掘りにより面整理・遺構の精査を行い、図面・写真等による記録作業を行った。

北側調査区では、当初第2・3次調査の結果から、整地層を挟んで2層以上の文化層が想定されたが、今回の調査では整地層は見られず、1層の文化層のみ確認された。度重なる校舎改築による擾乱が随所に見られ、上層は削り取られたものと考えられた。

南側調査区からは、トレンチ調査により堀跡が確認された。堀跡の上層部約1mの土は、再び重機械を用いて除去し、その後手掘りで掘り下げたものである。

本年は調査期間中悪天候に見舞われ、特に堀という遺構の性格上、水対策に窮する場面が多く見られた。また部分的な調査のため、堀跡に関しては安全性を考慮して完掘までには至っていない。

II 遺跡の立地と環境

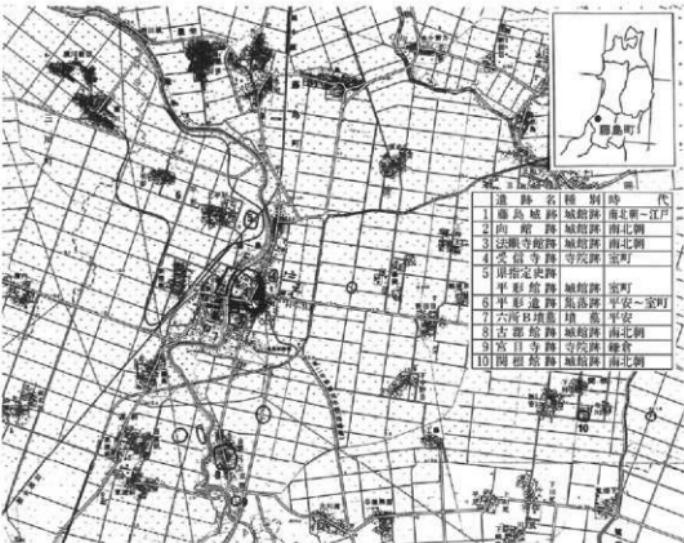
1 地理的環境

藤島城跡は、山形県東田川郡藤島町古橋跡108の1他に所在する。藤島町は山形県の北西に広がる庄内地方の中央部に位置する。町内の南東部は約1,000haの山林地帯である。西部は藤島川・赤川・京田川に潤される肥沃な耕地が、約4,000haに及ぶ広がりを見せる。この代表的な水稲単作地帯を支える川のひとつである藤島川は、源を月山に発し、藤島町内を南北に大きく蛇行した後、京田川に合流し、さらに河口近くで最上川と合流し、日本海に注ぐ。藤島城跡はこの藤島川の自然堤防上に立地し、標高は約12mを測る。

2 歴史的環境

藤島町内で今までに確認され、登録されている遺跡は49箇所を数える。その時代別内訳は、縄文時代11・弥生時代1・古墳時代1・平安時代22・鎌倉時代3・南北朝時代4・室町時代4・安土桃山時代1・江戸時代2である。

今日までに県教育委員会の手で発掘調査された遺跡は、平形館跡・土済遺跡・須走遺跡・古郡B遺跡・渡前遺跡・藤島城跡である。本遺跡の周辺には、藤島川沿いに中世以降の遺跡が点在する。北約700mには前述した平形館跡が所在し、藤島川の対岸には慶長年間の藤島城籠城の際に築かれたと伝える、向館(金ノ郭)が、南約200mには土塁の一部が残存する法眼寺館跡が所在する。



第1図 遺跡位置図(S=1:50,000)

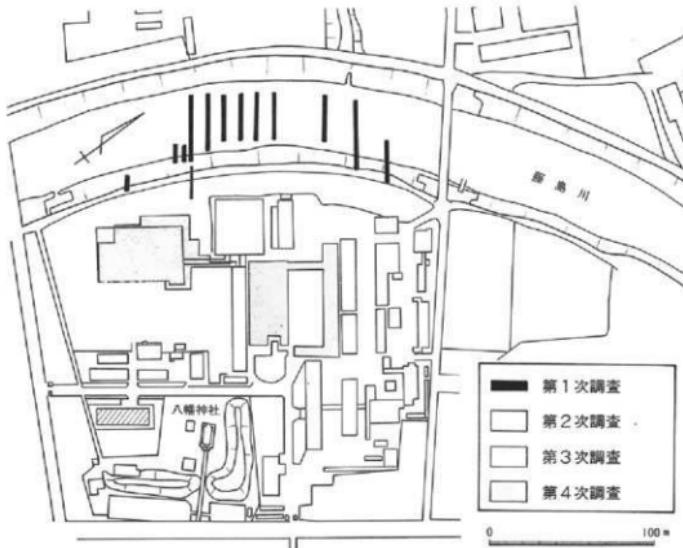
III 遺構

1 遺構の分布

今次調査における遺構の分布は、北側調査区では西寄りに、南側調査区では東寄りに集中して見受けられるが、これには校舎改築による搅乱が多分に要因しているものと考えられる。事実遺構が良好に遺存する所と遺構が希薄な所では、確認面で約20cmの高低差が生じる。また遺構が密集する所においても、3回ないし4回の重複が認められるものの、第2次調査で見られたような整地層は確認できなかった。

2 堀跡(第6図)

S D 1・2 堀跡は、南側調査区で検出された。S D 1とS D 2の境には土橋状の張り出しがあり、東西に細い水路様の溝でつながれる。溝は長さ約4m、幅約2m、深さ約50cmを測る。堀内には多量の木製品を含む。S D 1・2は、長さ幅とも調査区外に広がり、その全容は明らかではない。しかし八幡神社前に現存する堀から、幅は13m前後を測るものと推定される。深さは、最深部で S D 1 が表土下2.9m、S D 2 が3.5mを測る。堀北壁の傾斜角は約50度である。S D 2 内には、径10cm前後の丸材が斜めに刺さった状態で検出された。下部は鋭く削られたものが見られることから、打ち込まれたものと考えられる。先端部は腐食し確認が困難なもの、細く尖るものも見られる。杭は39本まで検出した。



第2図 調査区位置図(S=1:3,000)

3 井戸跡(第3・4・5図)

今次調査で検出した井戸跡は6基である。井戸跡の分布は北側調査区西寄りに集中する傾向が見られる。この傾向は、第2次調査の際にも見られ、地下水脈の影響と考えられる。

S E 35井戸跡　長径2.8m、短径2.5mの横円形を呈し、深さは2.3mを測る。上層部では、東側が広く掘られるが、下部ではほぼ垂直に掘り込まれる。井戸枠の構造は、底に4本の丸材が残るのみである。堀跡を除く遺構中、最も多い45点の遺物が出土した。

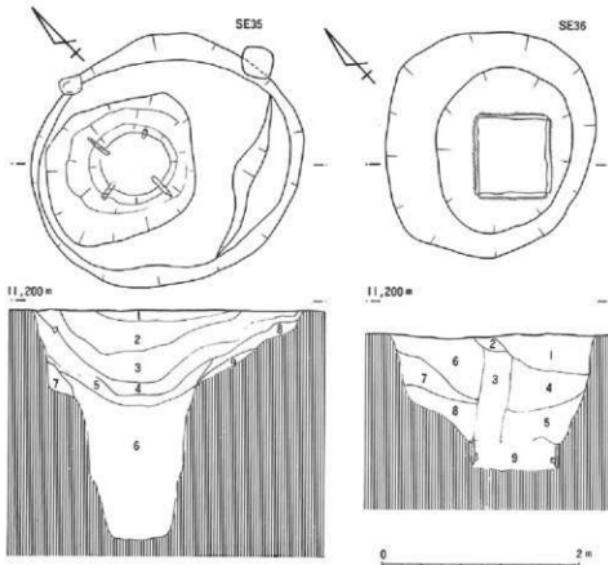
S E 36井戸跡　長径2.3m、短径2.1mを測る横円形の掘り方である。深さは1.4mを測る。最下部に一辺90cmの方形を呈する縦板、横桟の井戸枠が一段遺存する。

S E 37井戸跡　遺構南側は調査区外にあたり全景は不明であるが、径約3mの円形掘り方を有するものと考えられる。井戸枠は縦板、横桟で四隅に丸材と角材の支柱が立つ。

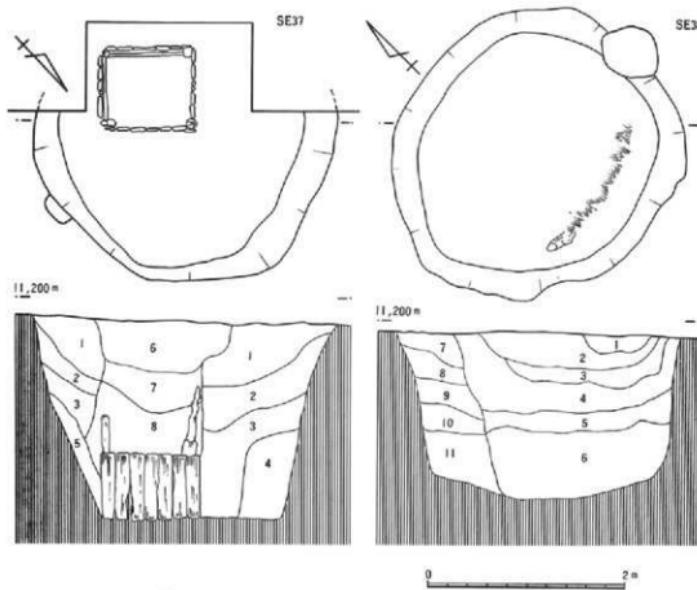
S E 38井戸跡　掘り方は、径約3mの円形を呈する。深さは1.7mを測る。井戸枠構造は枠周囲に巡らせたと考えられる茅の一端と支柱状の丸材一本が残るだけである。廃棄後に部材を取り、埋め戻されたものと考えられる。青磁・珠洲系陶器等が出土した。

S E 41井戸跡　掘り方は、径約2.9mの円形を呈する。深さは1.9mを測る。井戸枠は残らない。下部に長さ1.8mの加工痕が見られる丸材が横たわる。青磁等12点が出土した。

S E 52井戸跡　掘り方は径約2mの方形を呈するものと考えられる。西側はS E 41から、北側はS K 53から切られる。井戸枠は薄い縦板に横桟である。縦板は土圧によって内側に圧しつぶされている。



第3図 SE35・36井戸跡(S=1:50)



SE35	
1 黒 色	10 YR2/3 シルト
2 黄 色	10 YR2/2 シルト
3 塗 色	10 YR2/2 シルト
4 黑 色	10 YR2/2 シルト
5 黑 色	10 YR2/2 シルト
6 黑 色	10 YR2/1 シルト
7 塗 色	10 YR2/3 シルト
8 にじい黄褐色	10 YR5/4 シルト
9 塗 色	10 YR3/3 シルト

泥化駆・純土含む
泥化駆・黄褐色シルト含む
泥化駆・塗色シルト含む
泥化駆・(火)鉄・鐵錆含む
泥化駆・(火)鉄・鐵錆含む
泥化駆・塗色シルト含む
泥化駆・粗砂含む
泥化駆・粗砂含む
泥化駆・塗色シルト含む
泥化駆・塗色シルト含む
泥化駆・塗色シルト含む
泥化駆・純土含む

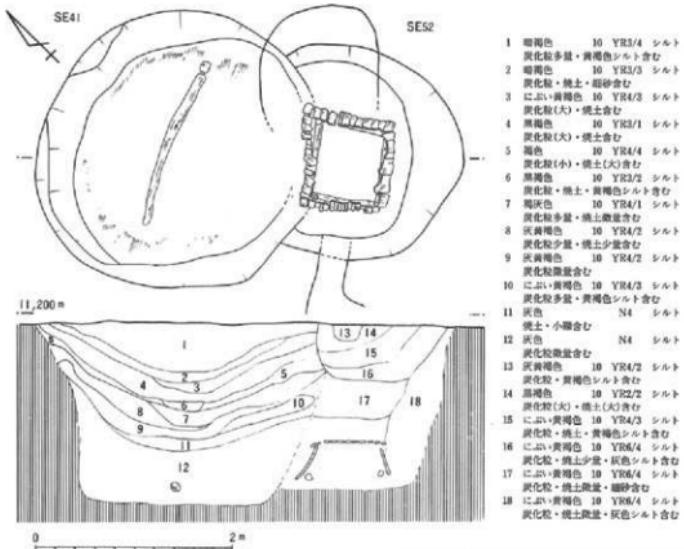
SE37	
1 黒 色	10 YR2/2 シルト
2 黄 色	10 YR2/2 シルト
3 黑 色	10 YR2/2 シルト
4 黄 色	5 GY4/1 シルト
5 塗 1-79色	2.5 GY4/1 シルト
6 黑 色	10 YR5/2 シルト
7 黑 色	10 YR2/1 シルト
8 塗 灰 黄 色	5 G3/1 細砂

泥化駆・黄褐色シルト含む
泥化駆・少量・黄褐色シルト含む
泥化駆・少量・黄褐色シルト含む
泥化駆・少量・黄褐色シルト含む
泥化駆・少量・黄褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む

SE38	
1 黒 色	10 YR2/2 シルト
2 黄 色	10 YR2/2 シルト
3 にじい黄褐色	10 YR4/3 シルト
4 黑 色	10 YR2/2 シルト
5 黄 色	10 YR2/3 シルト
6 塗 黄 色	5 D3/1 シルト
7 明 黄 色	10 YR2/6 シルト
8 黑 色	10 YR4/4 シルト
9 黑 色	10 YR4/5 シルト
10 黑 色	10 YR4/6 シルト
11 塗 黄 色	5 B3/1 細砂

泥化駆・少量含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む
泥化駆・少量・黃褐色シルト含む

第4図 SE37・38井戸跡(S=1:50)

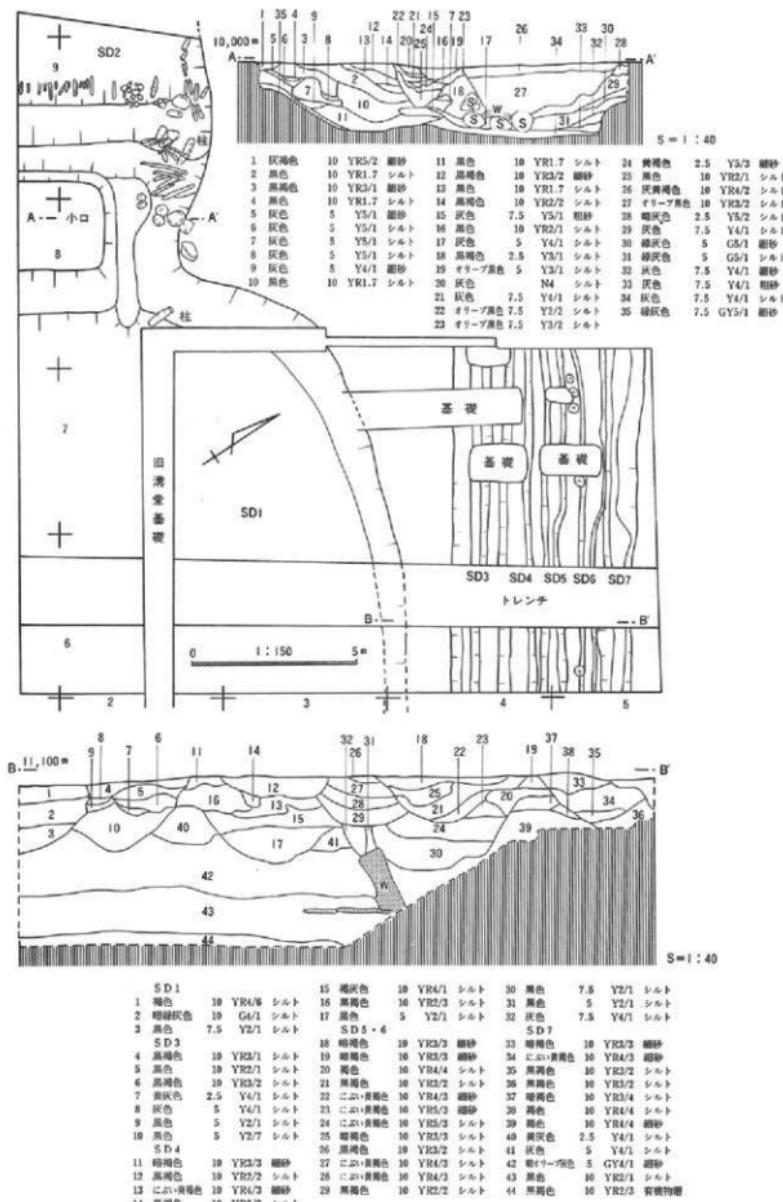


4 溝跡(第6図)

検出された溝跡は、東側調査区で1条、北側調査区で5条、南側調査区で5条の計11条である。特に注目されるのは、SD1堀跡北側に南北方向に走るSD3～7溝跡である。

SD3～7溝跡は、当初5条の溝が平行して走ると考えられたが、土層断面を検討した結果SD5とSD6は1条の溝からなることが明らかになった。したがって4条の溝が平行することになる。これらの溝の新旧関係は、遺構間の切り合いかから(古)SD4→SD3・SD5・6→SD7(新)となる。SD3とSD5・6は直接切り合いか無く新旧関係は不明である。共存の可能性も考えられる。またSD3は、SD1堀跡に切られることからSD3→SD1となる。これらのことから、SD7を除く溝群はSD1堀跡と共存せず、SD1が掘られる前段階に設けられたものと考えられる。確認できる幅と深さは、SD3が幅80cm、深さ55cm・SD4が幅115cm、深さ70cm・SD5・6が幅175cm、深さ75cm・SD7が幅60cm、深さ40cmを測る。深さは西へ行くほど増す。壁は40～50度の角度でしっかり掘り込まれる、溝底はSD4に凹凸が見られる以外は平坦である。長さは、約10m検出し掘り下がたが、東側は擾乱により不明、西側はさらに10m先で一部確認できたが他は不明である。この溝群は、覆土の状態から、埋め戻されたものと考えられる。

SD8は、東側調査区に位置する南北の溝跡である。長さ5.3mまで検出したが擾乱のため全長は不明である。幅は3.5m、深さは80cmを測る。壁は緩やかに掘り込まれるが、中央部の幅70cm程がほぼ垂直に掘り込まれる。自然堆積である。



第6図 塙跡・溝跡

5 土壙(第7図・8図)

土壙は北側調査区で31基検出され、遺構の遺存状況に呼応して、西寄りと中央部に集中する傾向が見られる。これらの土壙群は4種に大別できる。すなわち径1m以上、深さ1m前後を図る大形のもの(1群)、径1m以上であるが深さ50cm未満のもの(2群)、径1m未満で平面形が円形のもの(3群)、平面形が橢円形あるいは長方形を呈するもの(4群)である。これらの土壙群は、壁や底の形態あるいは覆土の違いによってさらに細分される。大分類による各々の数は、1群14基、2群9基、3群3基、4群5基である。本書で取り上げた代表的な土壙は、1群[S K30・31・39]、2群[S K32・33・34]、3群[S K14・18・26]、4群[S K16・27・42]である。

S K30・31は、S K31→30→39の新旧関係をもつ。壁は75度以上の垂直に近い角度をもって掘り込まれる。覆土の状態から上方は埋め戻されたものと考えられる。S K31からは石鉢の他、珠洲系陶器・青磁等10点の遺物が出土した。S K39は3段に掘り込まれ、覆土内下層、中層には大小の礫が入る。埋め戻されたものと考えられる。出土遺物は無い。

S K32・33・34は、S K33・34→32の新旧関係をもつ。S K32は垂直に近い角度で掘り込まれる。覆土は焼土を多量に含むほぼ單一層からなり、一気に埋め戻されたものと考えられる。東には径約50cmのピットがあり、S K32から切られる。このピットの底には礫石状の偏平な石が見られる。S K33・34は切り合いで無く新旧関係は不明であるが、緩やかに浅く掘られる形態と、覆土の状態から同時期のものと考えられる。

S K18・26は、土層断面や平面形を見る限り、柱穴の可能性も考えられるが、径50cm前後を測る周囲の柱穴に比べて大きく、他に同様のものが見られないことから、土壙として登録したものである。

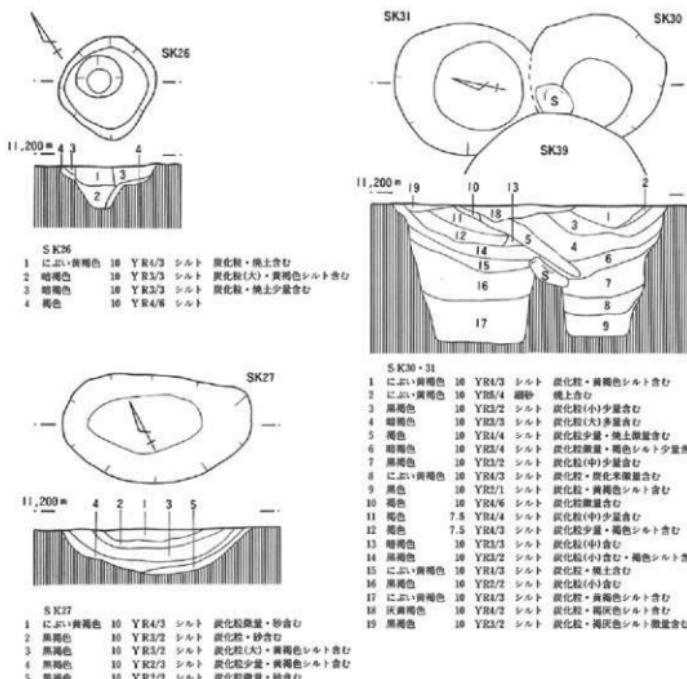
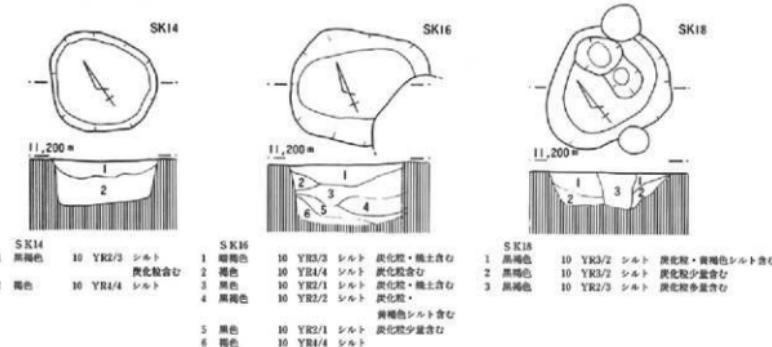
平面形が橢円形を呈するS K27は、壁が緩やかで底も丸みを帯びる。覆土は自然堆積したものと考えられる。S K16・42は、平面形が隅丸の長方形を呈するものである。S K16は旧校舎の搅乱によって南東角が不明である。覆土には濁りがあり、埋め戻されたと考えられる。S K42は2段に掘り込まれた形状であるが、土壙が掘られる以前に南西から北東方向に掘られた溝跡が埋め戻され、その上に土壙が掘られたものと考えられる。なおS K39に見られる段も同様に、この溝跡が続いたものと考えられる。

6 小口

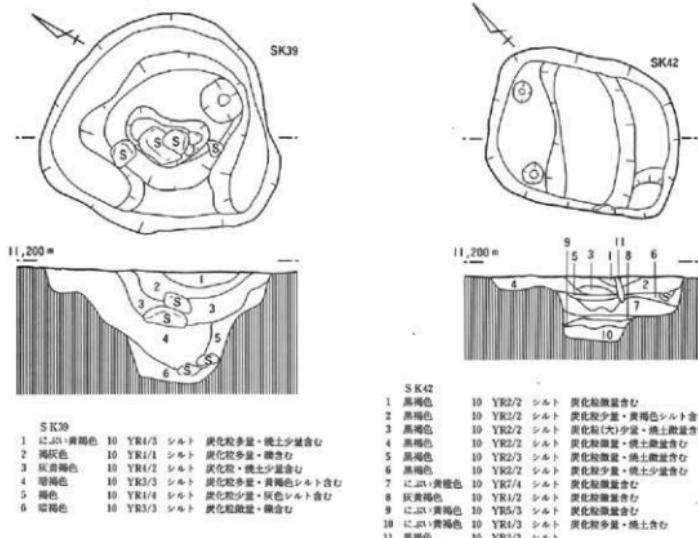
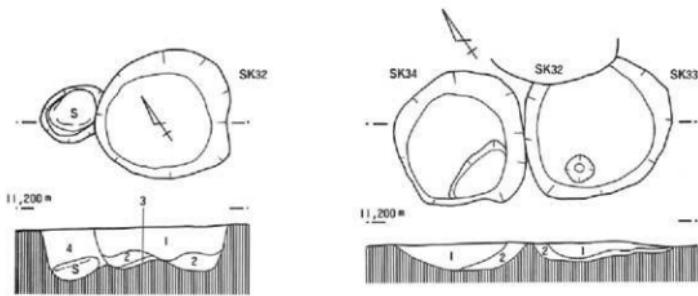
小口はSD1と2番跡の間で検出されたもので、土橋状の張り出しがあり、東西両側に一对の柱を検出した。柱の径は約30cm、長さは検出した面から約4m埋められていた。一部表皮を残す丸柱で、先端部は削られ打ち込まれたことを伺わせる。東の柱は西へ、西の柱は東へ傾いており、上部の構造物が倒壊した際に傾いたと考えられる。小口に設けられた門跡と考えられる。

7 柱穴

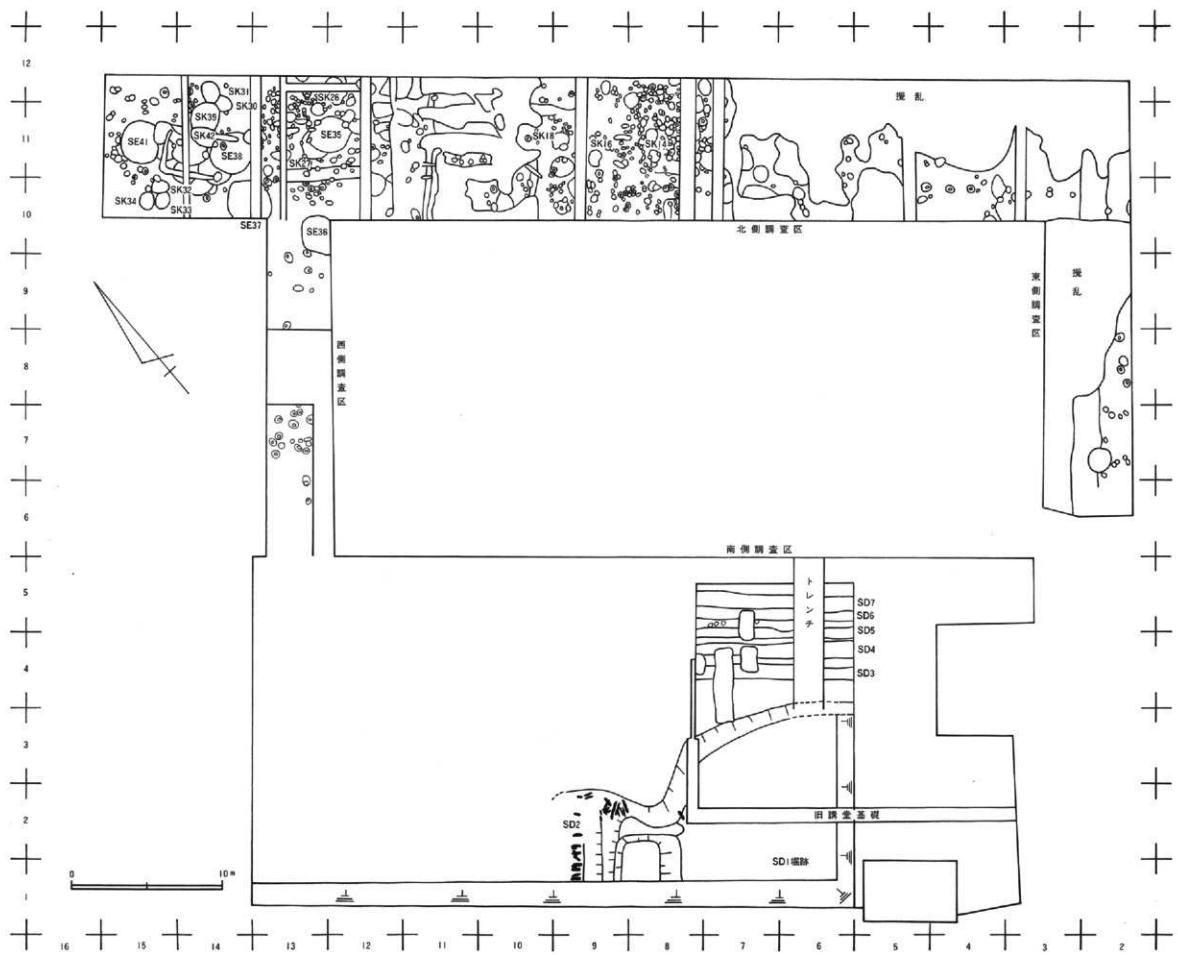
ピットを含めた柱穴の数は460基あまりを数える。11-8グリッド付近に集中し、重複が多く見られる。しかし今次調査では建物跡を構成するには至らなかった。



第7図 SK14-16-18-26-27-30-31土壤(S=1:40)



第8図 SK32-33-34-39-42土壤(S=1:40)



第9図 造梯配置図(S=1:250)

IV 遺物

1 遺物の分布

今次調査区における遺物の出土状況は、校舎増改築に伴う擾乱から一般的に希薄である。特に上層が削られた所に関しては、遺構内からの出土も少ない。したがって遺物の分布状況からは、今回検出した遺構が本遺跡全体の中で、どの位地を占めるものか不明瞭である。出土遺物には、陶磁器・金属製品・土製品・石製品・木製品がある。陶磁器類の出土総数は754点で、このうち55%の413点が遺構内からの出土である。主に堀跡や井戸跡等の深い遺構からの出土であり、遺構内出土の40%あまりを数える。同様に、木製品も前述の遺構からの出土が大半を占める。

2 須恵器(第10図1~3)

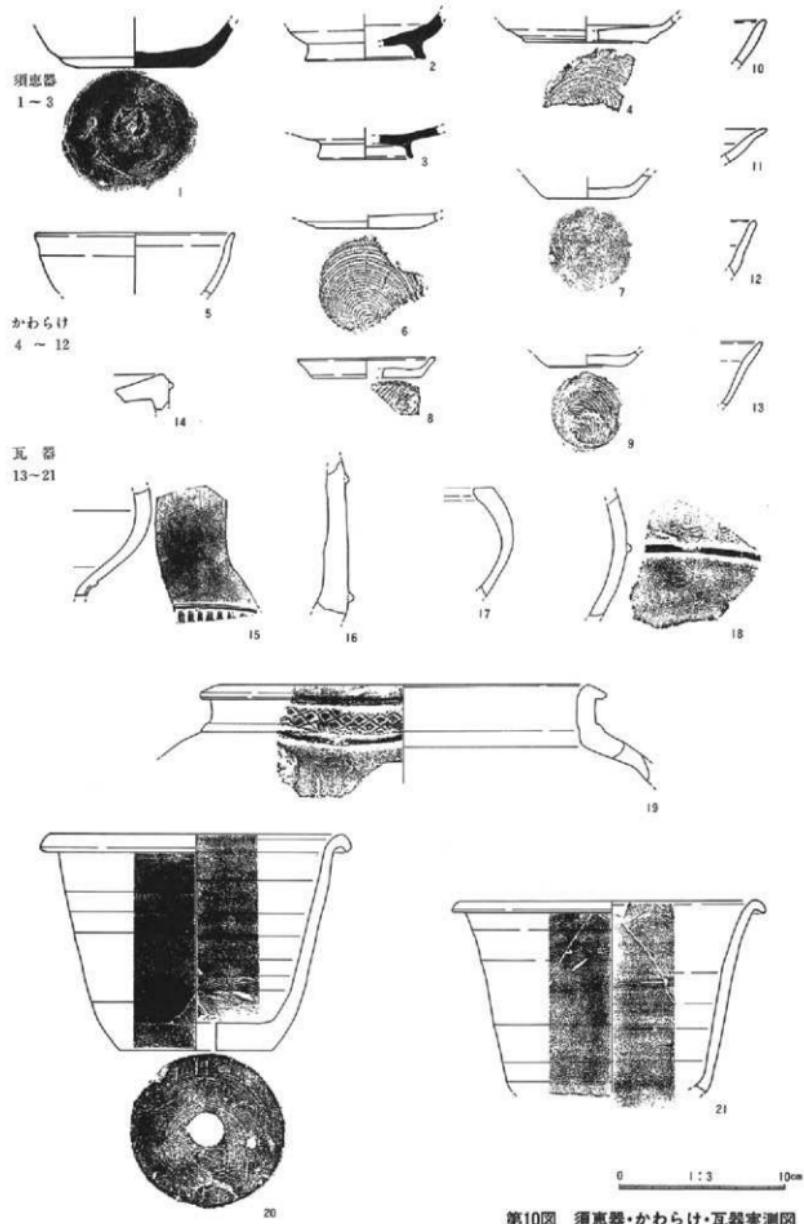
須恵器は陶磁器全体の1.9%、14点の出土である。内軒は蓋1点、壺5点、高台壺1点、皿1点、臺6点である。1はSD1堀跡の底面から出土したヘラ切りの壺である。底部が肥厚し、粗雑な切り離しである。2はSK44出土の高台壺である。底部は4分の1程しか残らないが、ヘラ切りであろうと考えられる。3はSD2出土の皿である。底部は回転糸切りで、墨書が認められる。銘は不明である。これらの須恵器は、9世紀第3四半期頃の所産と考えられるが、これまでのところ本遺跡では当該時期の遺構は確認されていない。

3 かわらけ(第10図4~12)

かわらけは4.8%、36点の出土である。堀跡から出土した18点が半数を占める。小破片のため図上復元でも全形を知り得る資料はない。成形にはすべてロクロを用い、底部は回転糸切りである。底径が70mm前後の大型のものと、50mm前後を測る小型のものが見られる。また身が深くなる5・10・12の碗形のものと、8・11のような皿が見られる。5には、口縁部と体部の一部に2次火熱を受けた痕跡が認められる。

4 瓦器(第10図13~21)

瓦器は5%、36点の出土である。13は内外面とも黒色処理した碗である。器厚は薄く、口縁部付近で幾分屈曲し外反する。内面はロクロナデ、外面は口縁部がロクロナデ、体部は弱いミガキ調整が認められる。14・16は方形の、17は円形の浅鉢形火鉢である。14は内側へ折り返された口縁部である。張り付けられた凸線が見られる。16は外面に2条の凸線が張り付けられる。外面はミガキ、内面はナデ調整である。17は内外面ともロクロ調整である。15・18・19は土風炉である。15は短頸壺形の腰部と考えられる。横方向の凸線を削り出してあり、その下部に縱方向の凸線が巡る。外面はミガキ、内面はロクロ調整である。18は凸線の上下にスタンプを連続押捺したものである。スタンプは摩滅のため不明瞭であるが、凸線の上に菱形文・巴文(?)、下に花菱文と考えられる。19は口縁部外面上下に凸線を巡らし、凸線間に菱形文を連続押捺したものである。肩部には火窓が認められる。20・21は植木鉢である。20は底部に焼成前に穿孔したものである。21も同形と考えられる。



第10図 須恵器・かわらけ・瓦器実測図

5 珠洲系陶器(第11図～13図)

珠洲系陶器は、今次調査中最も出土量が多く、全体の26%、195点を数える。その内訳は、壺7点、甕157点、擂鉢31点で、圧倒的に甕が多い。これは体部小破片を見た限りでは判別しかねるものが多く、それらは甕として集計したことと想るものと考えられる。

(1) 壺(第11図1・2、13図1)

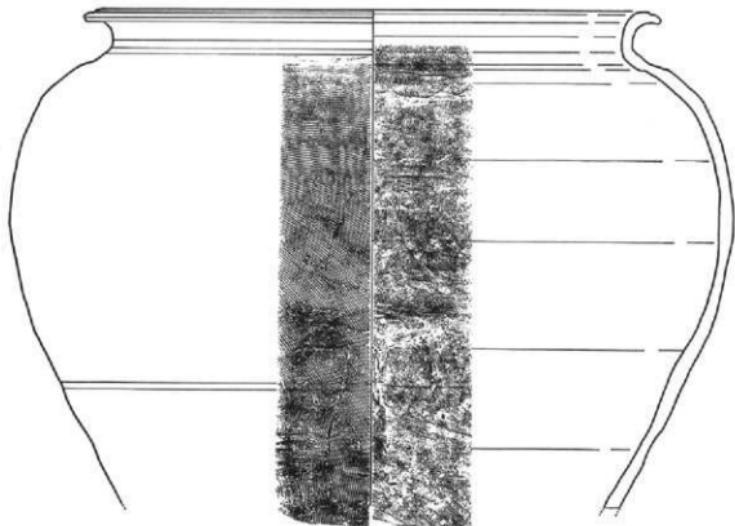
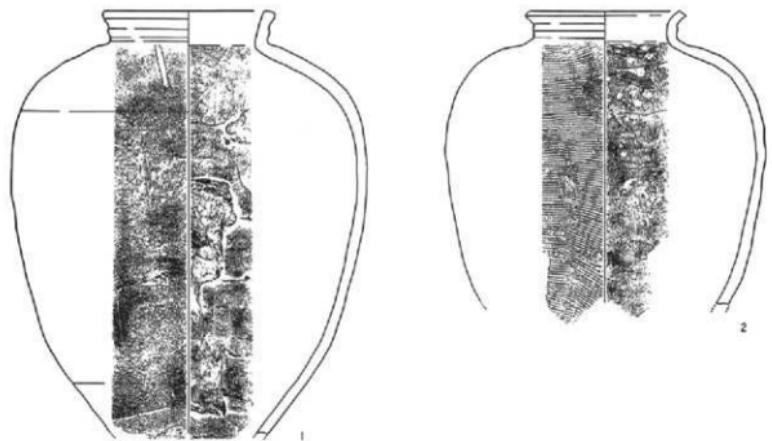
第11図1は器高50cm以上の研磨壺である。口頭部は僅かに外反し、中位に微隆起を持つ。口縁端面は平坦に作られる。体部の重心は上位にあり、いわゆる怒り肩を呈する。肩部には刻線文「|」が施される。珠洲編年の第V期(西方寺第二号窯式)と考えられる。2は綾杉状叩打を施したものだが、本来の綾杉状叩打に見られる装飾性は失われている。口頭部は短く直立し、中位に微隆起を持つ。口縁端部は外反し、僅かに外側に挽き出されることによって、断面が三角形の印象を与える。体部は大きく歪むが、重心は上位にあると考えられる。内面には炭化した糊が多量に付着し、用途を伺わせる。第13図1は体部下半から底部のみの資料で、小壺と考えられる。内面には強いロクロ調整が認められる。外面はロクロ調整後ナデが施され、明瞭な指痕も認められる。底部は静止糸切りである。

(2) 甕(第11図3、第12図)

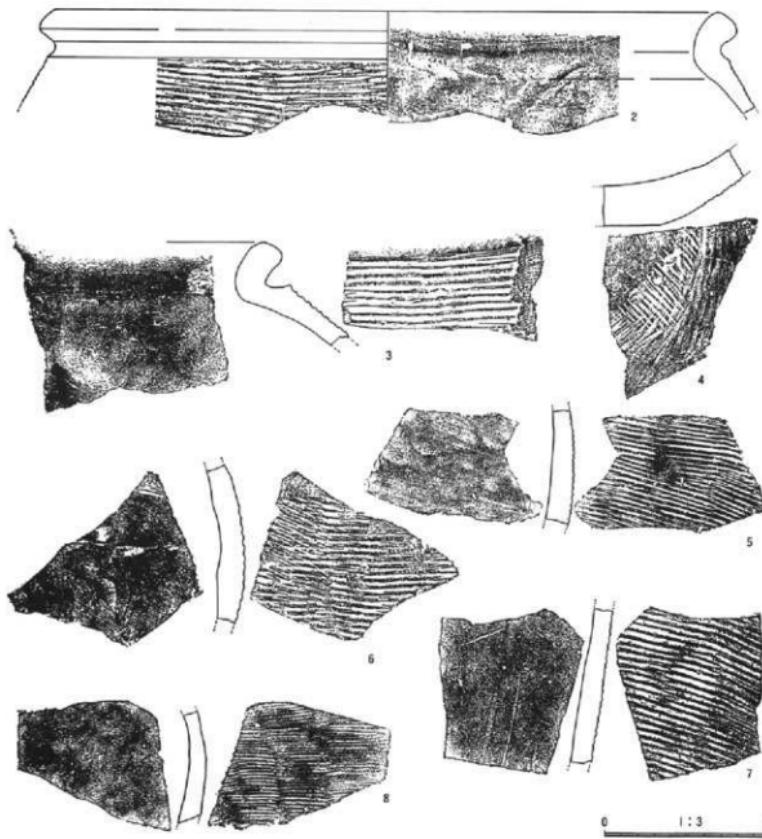
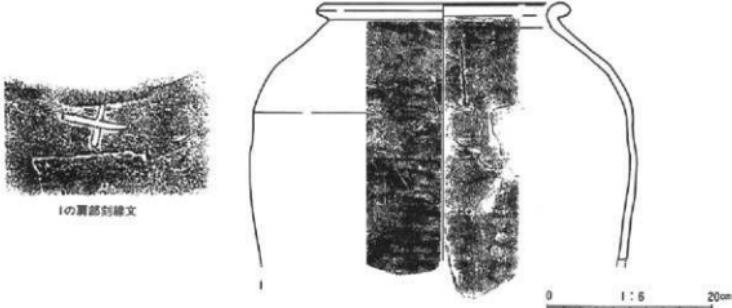
第11図3はSD2出土の口径650mm、体部最大径880mmを測る大甕である。口縁部は外反し嘴状に長く挽き出される。口頭部は直立し、肩部から大きく膨らみ丸みを帯びる。底部は遺存しないが、体部の傾きから小ぶりなことが推測される。外面は細密で丁寧なタタキ目が見られ、体部下半に強いナデが認められる。内面には押圧痕とナデ調整が見られる。肩部から口頭部にかけて、粘土紐巻き上げの痕跡も認められる。これらの特徴から、珠洲編年の第I期(寺社瓶割坂第一号窯式)まで逆上の可能性をもつものと考えられる。第12図1は口縁部に粘土紐を貼り付け、円頭状に外反させ仕上げたものと考えられる。肩部は緩やかに張り出しが、体部はほぼ直線的に下半に至るものと考えられる。外面は丁寧に研磨され、内面は押圧痕とナデ調整が認められる。肩部には刻線文「+」が施される。2の口縁部は、くの字状に外反させた端部に粘土を貼り付け、円頭状に仕上げている。頭部と肩部の傾きから、張り出しが弱く直線的な体部を有するものと考えられる。3の体部には、目の粗い布と漆状のもので、破損箇所を接合した痕跡が認められる。4は底部、5～8は体部の破片資料である。

(3) 擂鉢(第13図2～10)

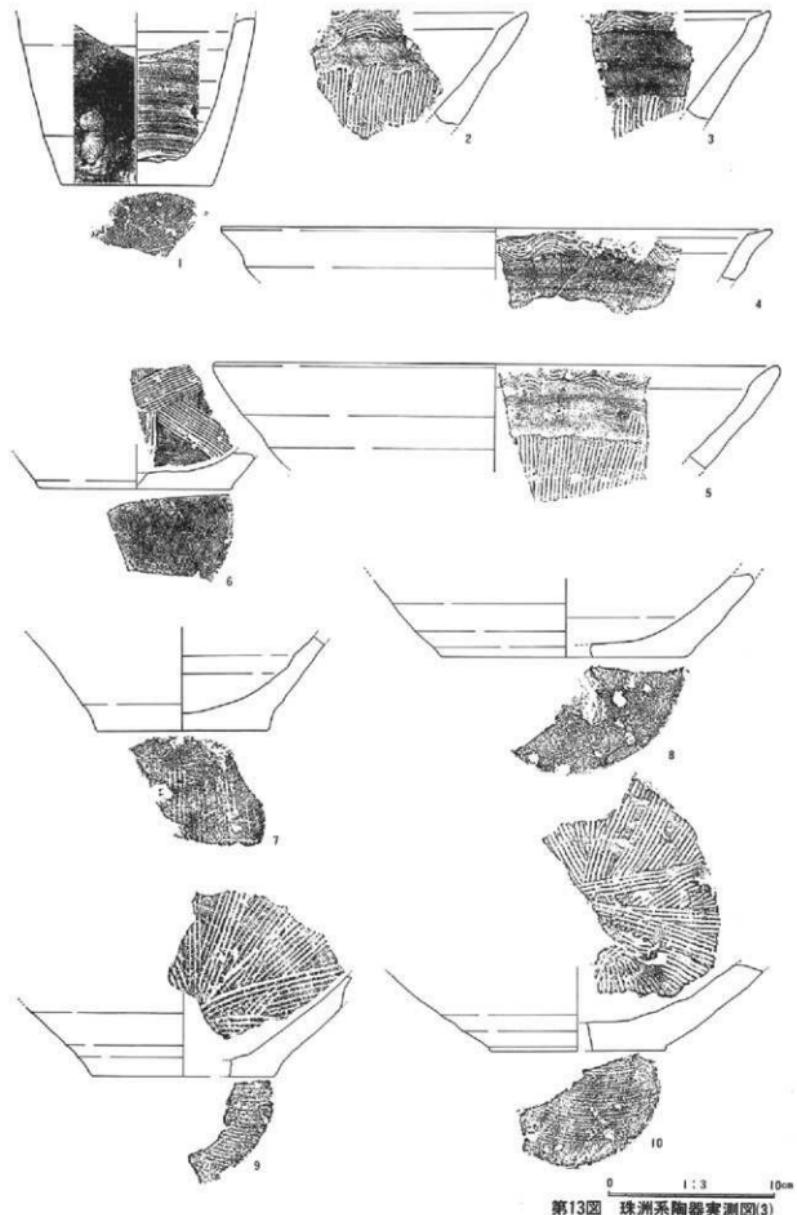
大半の擂鉢には卸目が見られるが、7については認められない。卸目も隙間無く施すものと、そうでないものの(6)が見られる。前者では、2cmで8本の櫛歯結束による太い卸目が平均的であるのに対し、後者では2cmで12本の細い卸目が施される。また底部についても6はナデ調整を行っているのに対し、他は静止糸切りの痕跡が認められる。口縁形態にも2種類認められる。2・3・5は肥厚した口縁部の内面に段を有し、端面に櫛書き波状文を施す。4は口縁部を弱く引き出し、水平に近い端面に波状文を施したものである。これらの特徴により、擂鉢の多くは珠洲編年第V期からVI期頃の所産と考えられる。



第11図 珠洲系陶器実測図(1)



第12図 珠洲系陶器実測図(2)



第13図 珠洲系陶器実測図(3)

6 越前焼(第14・15図)

越前焼は珠洲系陶器に次ぐ21.6%、163点の出土である。器種には壺、甕、擂鉢がある。各々の出土量は、壺7点、甕132点、擂鉢24点である。

(1)壺(第14図1～3、第15図1・2)

1は器高380mmを測る大形の壺である。頸部は強く外反し、口縁部がやや肥厚する。肩部は丸く膨らみ、体部は直線的である。器面は口頸部がロクロ調整、体部がナデ調整に研磨を行ったものと考えられる。2は口頸部を外反させ口縁部を玉縁状に丸く作り出したものである。3の口頸部は直立し、口縁部を折り返して端部を引き出したものである。第15図1、2は底部資料である。1の内面には体部の立ち上がりに指頭痕が認められる。2の体部は直線的に立ち上がり、内面にはロクロ調整が見られる。

(2)甕(第14図4～6・第15図3)

4・5は口頸部の資料である。4は均一な器厚で外反させた口頸部である。5は口縁端部が肥厚し、頸部上位に一条の沈線を削り込むことによって、隆蒂を作り出したものである。6は体部破片資料で、肩部に近い所と考えられる。外面には「本」と格子目の押印がなされたものである。内面は粘土紐の巻き上げ痕を横方向のナデでかき消している。なお漆による接合の痕跡も認められる。3の外面には、板状工具による縱方向のナデが認められ、濃緑色の自然釉が垂れる。内面には全面に自然釉が付着する。

(3)擂鉢(第15図4～8)

4は単目が隙間なく入れられたものである。5は口縁内面に一条の沈線があり、沈線の下から幅2.6cmで8本の単目を持つ。6は口縁内面の一条の沈線上から幅3.2cmで8条の太い単目を持つ。7も口縁内面の一条の沈線上から幅3.1cmで10本の単目を持つ。8は底部回転糸切りで、体部は薄く中位から外反するものと思われる。幅2cmで8本の単目を持つ。胎土はきめ細かく、中心まで赤褐色を呈し越前焼のそれとは異なる様相を持つ。本報告では、越前焼として分類したが、検討を要する遺物である。

7 瀬戸焼(第16図・第17図1～14)

瀬戸焼は12.7%、96点の出土である。半数以上の52点が灰釉の皿である。

(1)灰釉皿(第16図1～11)

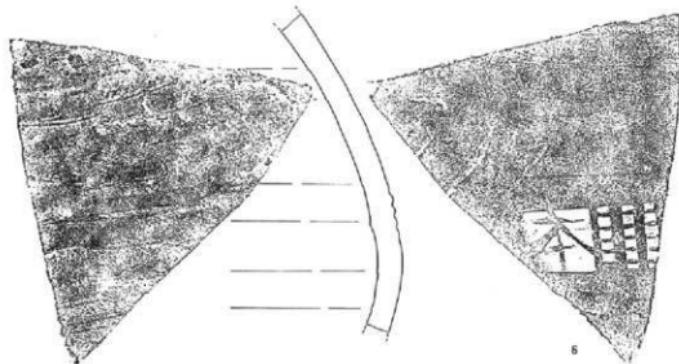
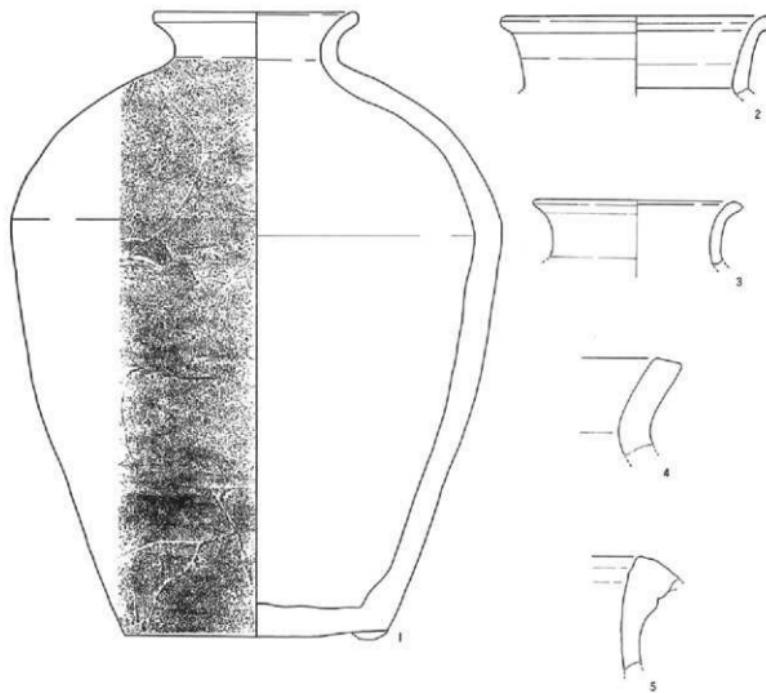
1～4は内底に印花を押印したものである。4の口縁部は漆による接合が見られる。4・7は2次火熱を受けている。11は口縁部内面に一条の沈線を有する。

(2)灰釉梅瓶(第16図15・16)

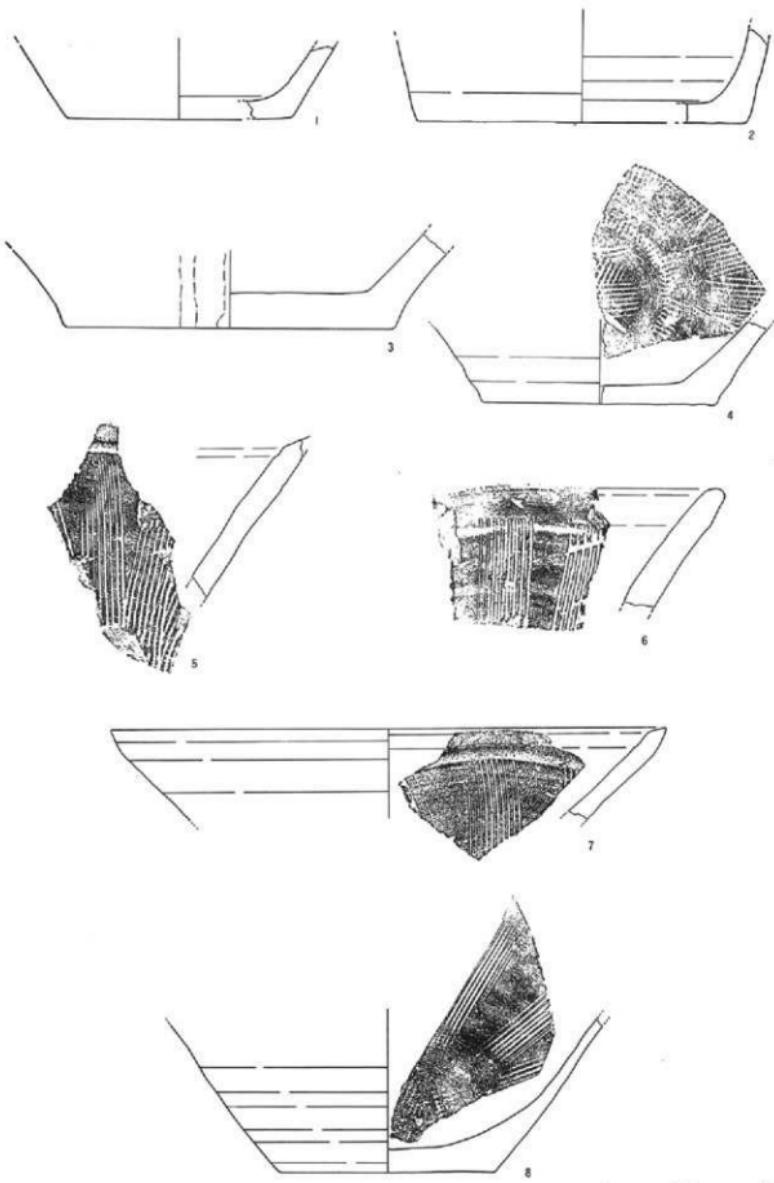
15は肩部に4条の櫛描き波状文、体部上位に4条の平行沈線を2帯施したものである。16には施文は見られない。15・16とも2次火熱を受けている。

(3)天目茶碗(第17図3～11)

天目茶碗の口縁部形態は4タイプに分類される。屈曲し外反するもの(3～5)、屈曲し内弯するもの(6)、わずかに外へ引き出すもの(7)、細く引き出しが体部とほぼ同じ傾きのもの(8～11)である。

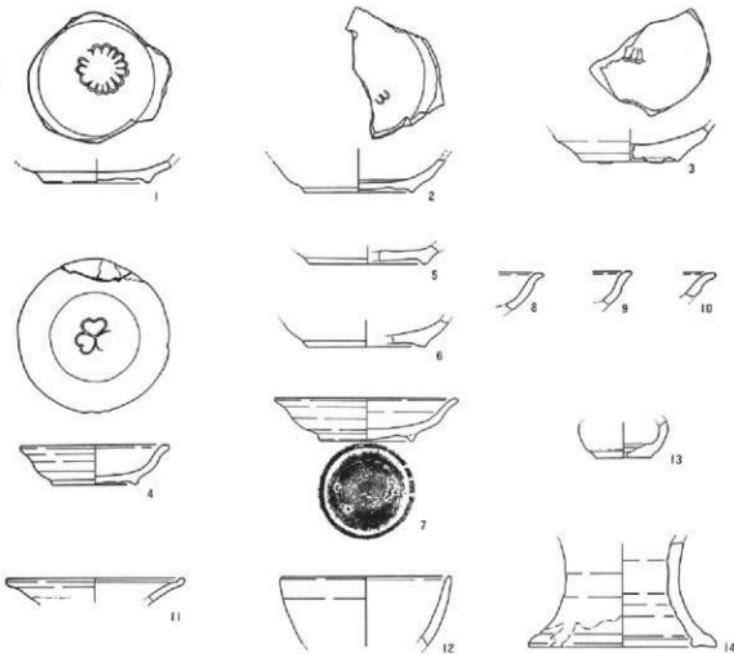


第14図 越前焼実測図(1)
0 1:3 10mm

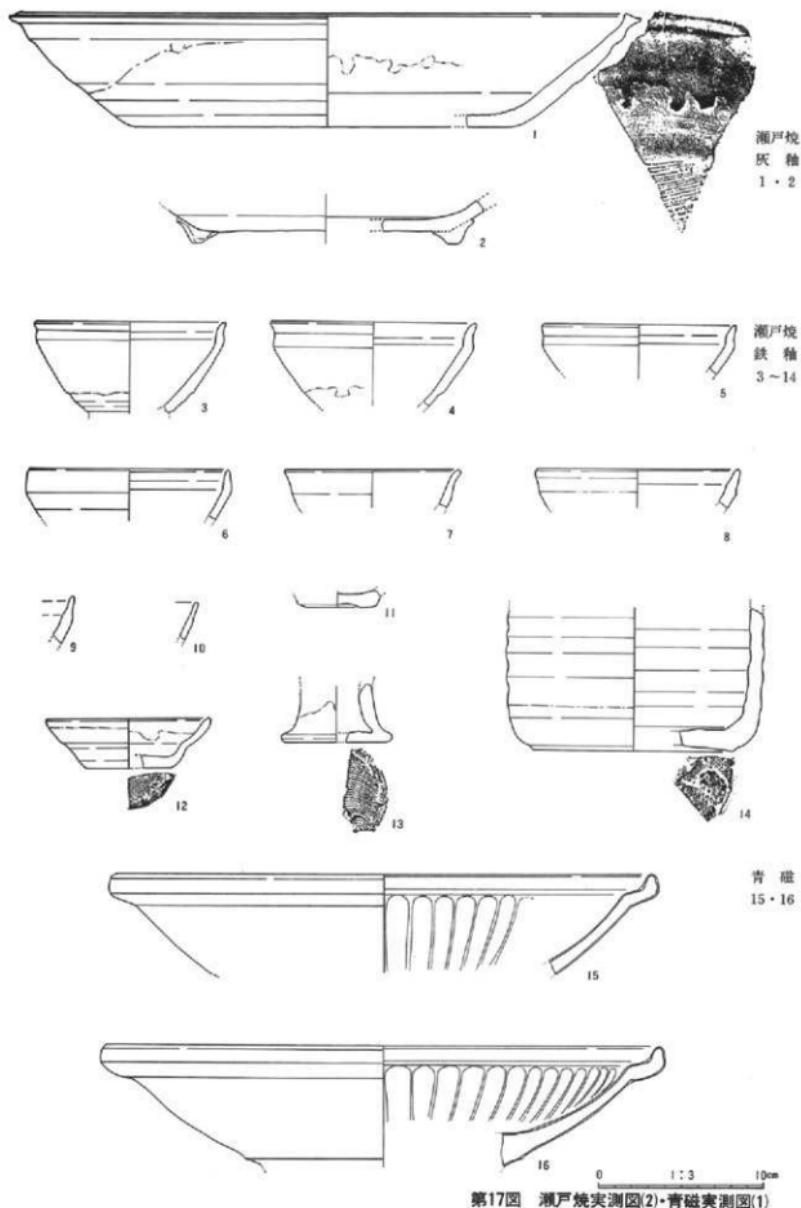


第15図 越前焼実測図(2)

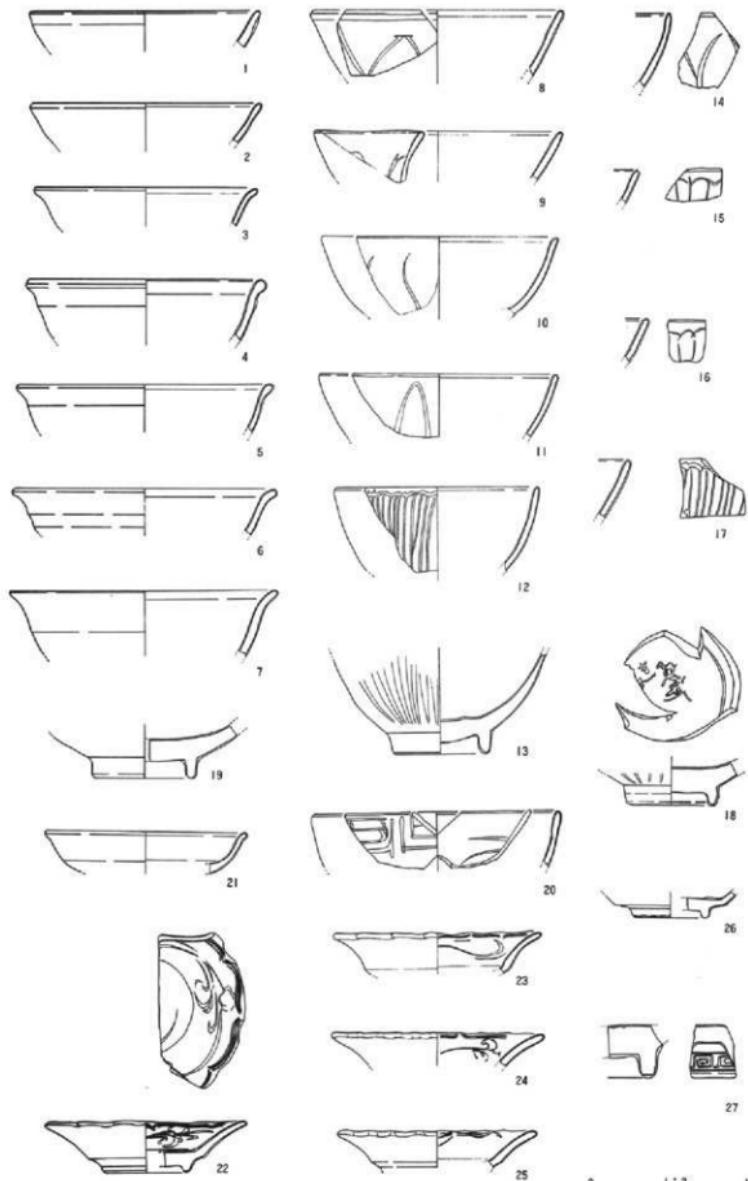
瀬戸焼灰釉



第16図 濑戸焼実測図(1)



第17図 潤戸焼実測図(2)・青磁実測図(1)



第18図 青磁実測図(2)

(4) その他の瀬戸焼

第16図13は灰釉の茶入である。体部下半から底部にかけて露胎である。底部は回転糸切りである。14は灰釉瓶子の脚部と考えられる。外面下方と内面は露胎である。第17図1は灰釉鉢皿である。内底に櫛引きの目が刻まれる。内外面とも体部下半から露胎である。2は三足の盤と考えられる。12は鉄釉の皿である。口縁部のみ施釉される。13は鉄釉の花瓶と考えられる。14は鉄釉の水指と考えられる。体部下方は露胎である。

8 青磁(第17図15・16、第18図)

青磁は16.7%、126点の出土である。蓮弁文碗32点、無文碗20点、皿29点である。

(1) 碗(第18図1~20)

碗の文様には、無文(1~7)、蓮弁文(8~18)、雷文帯蓮弁文(20)が見られる。無文碗の口縁部形態は、体部と同じ角度をたもつもの、肥厚させた端部を外反し玉縁状にしたもの、均一な器厚で外反させたものに分けられる。釉調はまちまちで、4のように白濁するもの、7のようにガラス状の釉が厚く掛かり不規則な買入が見られるもの等がある。蓮弁文碗の8~11・14は線刻により、単位文を成す大振りの蓮弁が描かれ、12・13・15~17は口縁部に連続する弧線から引いた直線で細蓮弁を描いたものである。雷文帯蓮弁文碗と確認できたものは3点のみである。20は釉が厚く、白濁するため不明瞭であるが、単独文と考えられる。13・18・19は高台内の釉を搔き取って露胎にしている。

(2) 皿(第18図21~26)

21は体部が内彎し、玉縁状の口縁部になる無文の皿である。他は腰部で強く屈曲し、体部が外反する稜花割花文皿である。22は口縁部に、23は体部外面に釉切れが認められる。胎土は灰色のものが多く見られ、釉が薄いことから発色は暗い緑色を呈する。

(3) 盤(第17図15・16)

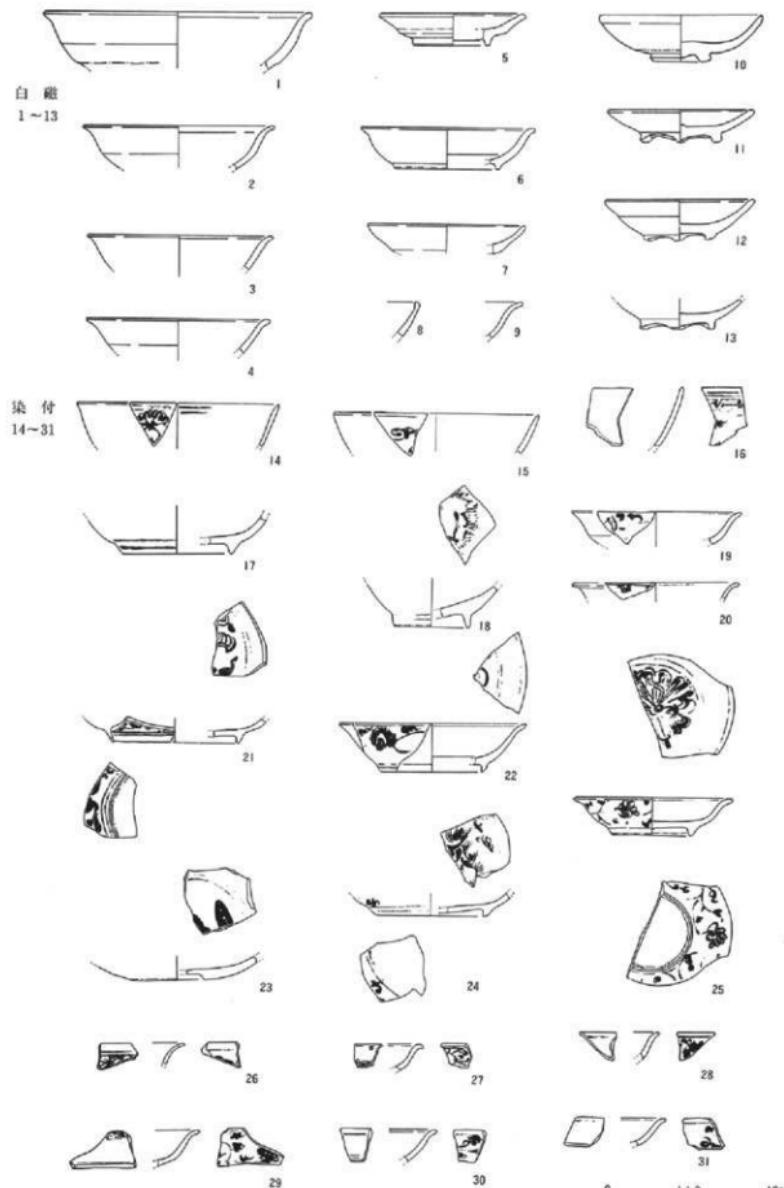
体部は内彎し、水平に曲げられた口縁部から直立する端部が引き出される。内面には太い菊花状の鏽文を施す。外面下部に、削り込みによると考えられる段を有する。第18図26は、盤あるいは大皿の高台と考えられる。高台に雷文を施し、内底にも刻文が認められる。

9 白磁(第19図1~13)

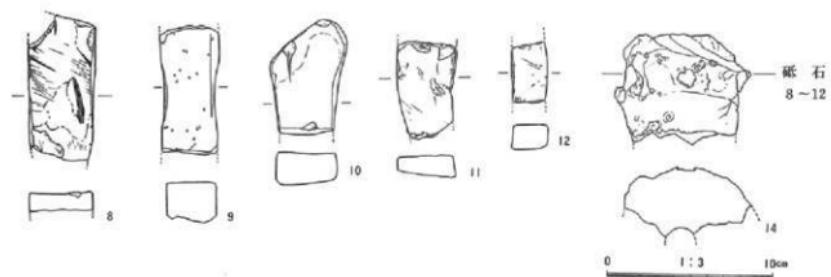
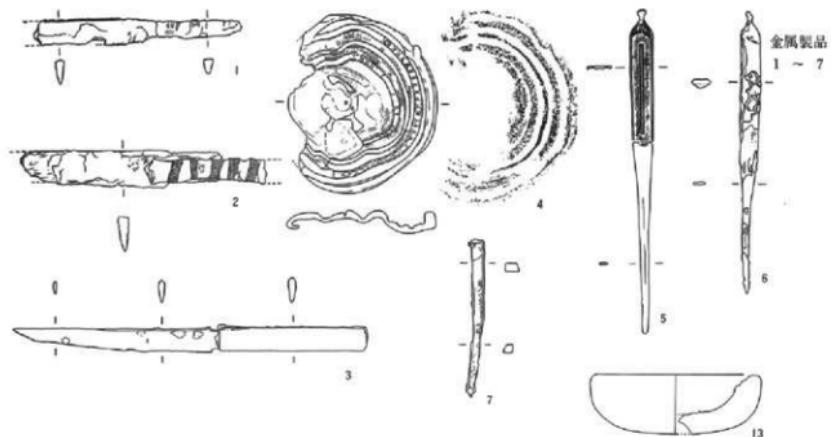
白磁は6.1%、46点の出土である。器種には碗と皿が見られるが、圧倒的に皿の出土量が多い。碗と見られたのは2点のみである。1の碗は体部内外面の中位に微隆起線が認められる。体部下部は露胎である。漆による接合痕が認められる。皿の口縁部は端反のものと、そうでないものとが見られ、端反のものは一般的に身が深い。10は削り出しの輪高台、11~13は高台に抉りが入れられる。10・13は底部露胎、11・12は全面施釉である。

10 染付(第19図14~31)

染付は4.6%、35点である。器種には碗と皿が見られる。14~18は碗である。器厚は均一で、直線的である。皿は端反のタイプが主流である。高台の断面は三角形で、疊付を露胎にする。23は基筒底である。文様構成は牡丹唐草に十字花文と玉取獅子が中心と思われる。17・25は2次火熱をうけている。18は外面に釉切れが見られる。



第19図 白磁・染付実測図



第20図 金属・土・石製品実測図・錢貨拓影

11 金属製品(第20図 1~7)

1~3は刀子である。2には木製柄の一部が遺存している。柄には螺旋状に漆が塗られていることから、紐状のものが巻かれていたものと考えられる。3の柄は銅製と考えられる。4は銅鏡である。強い火熱を受け湾曲している。5・6は笄、7は釘である。

12 石製品(第20図 8~12、第21図)

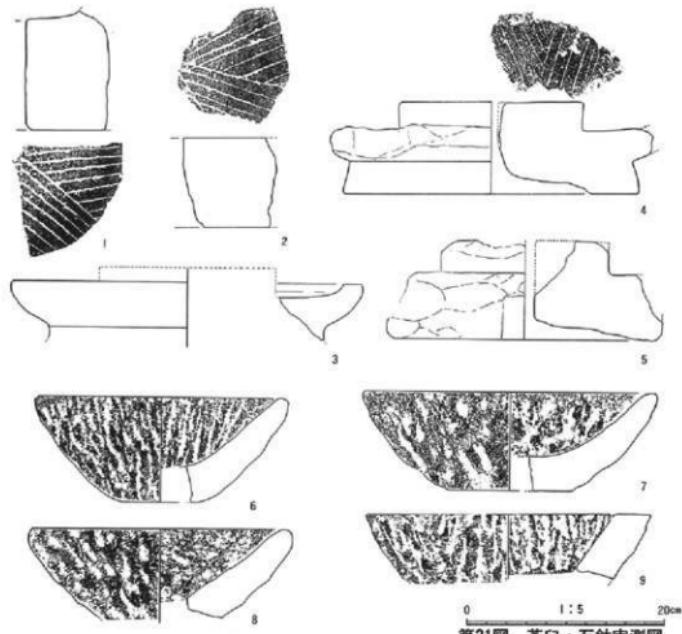
石製品はSD2からの出土が最も多く、31点を数える。第20図8~12は砥石である。砥石は21点出土しており、大半が仕上げ砥と考えられる。第21図1~5は茶臼である。点数は21点を数える。1は上臼、2は下臼である。6~9は石鉢である。36点の出土である。

13 銀貨(第20図15~32)

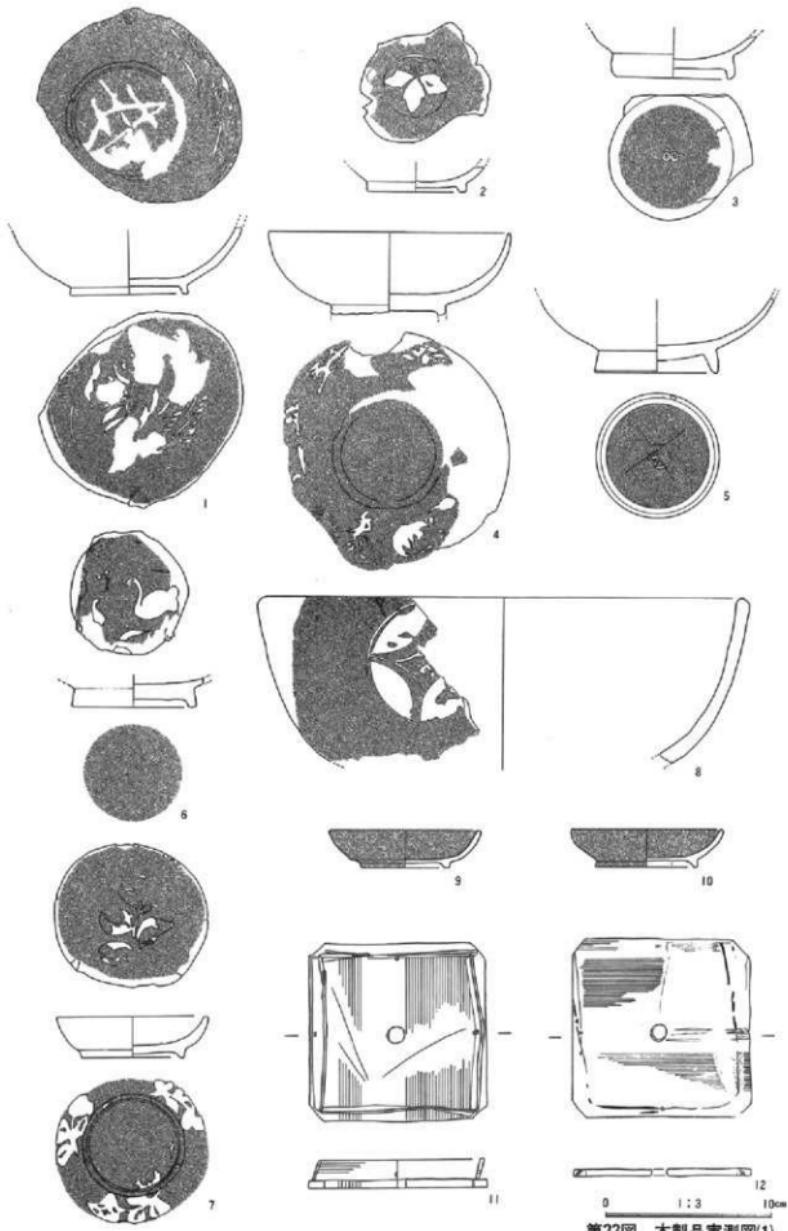
銀貨は単独で出土した20枚と発見した塊が2個である。SD2からの出土が12枚を数える。元豊通宝等の北宋錢と永樂通宝等の明錢が多く認められる。

14 木製品(第22図、23図)

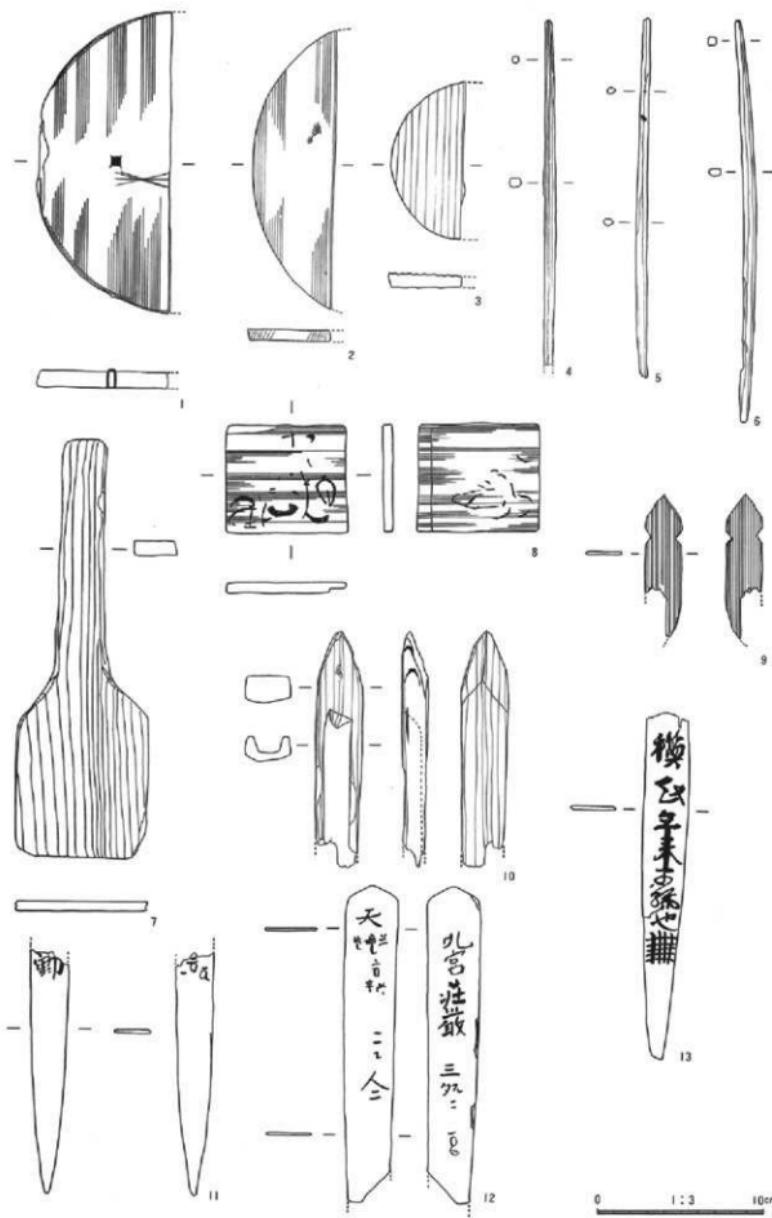
木製品はSD2からの出土が大半を占め、器種には漆器・折敷・曲物・笠・箸・舟形・呪符等がある。第22図1~10は漆器である。そのほとんどは黒漆の下地に朱漆で花鳥を描いたものであるが、5の様に内外面朱漆で、高台内のみ黒漆を用いたものも見られる。11~12は中央に穴を穿ったもので、用途は不明だが折敷の一種と考えられる。第23図9は人形、10舟形と考えられる。11~13は呪符である。11の表面には「□動明王☆」、裏面には梵字が確認できた。13は「蔵民将来子孫也○」と考えられる。12の銘は不明瞭である。



第21図 茶臼・石鉢実測図



第22図 木製品実測図(1)



第23図 木製品実測図(2)

表-1 出土陶磁器観察表(1)

押 出 番 号	器 種	計測値(mm)			胎 土	色 調	調 整 技 法	出土地点
		口径	底径	高さ				
第 5 類	环	-	72	-	致 密	灰白 N 7	ロクロナデ ヘラ切り	SD 1
	高台环	-	74	-	致 密	青灰 5DG6/1	ロクロナデ ヘラ切り	SK 4
	皿	-	(58)	-	致 密	灰白 N 7	ロクロナデ 回転糸切り	SD 1
	皿	-	(76)	-	致 密	灰白 2.5YR8/2	ロクロナデ 回転糸切り	SD 2
	皿	(122)	-	-	致 密	にじい黄緑 10YR7/2	ロクロナデ	SD 2
	皿	-	64	-	致 密	灰白 10YR8/2	ロクロナデ 回転糸切り	2-6
	皿	-	50	-	致 密	にじい橙 7.5YR7/4	ロクロナデ	SK 43
	皿	(84)	(66)	12.5	致 密	灰白 10YR8/1	ロクロナデ 回転糸切り	SD 2
	皿	-	45	-	粗砂混入	灰白 2.5Y7/1	ロクロナデ 回転糸切り	SD 1
	皿	-	-	-	致 密	にじい橙 7.5YR7/3	ロクロナデ	2-12
第 10 類	皿	-	-	-	致 密	灰白 10YR6/1	ロクロナデ	SD 2
	皿	-	-	-	致 密	淡黄緑 7.5YR8/3	ロクロナデ	3-9
	皿	-	-	-	致 密	黑 N2/1	ロクロナデ	SD 2
	火鉢	-	-	-	致 密	灰黄褐 10YR5/2	ミガキ ナデ	SE 35
	火鉢	-	-	-	致 密	淡黄緑 7.5YR8/4	ミガキ ロクロナデ	SK 10
	火鉢	-	-	-	致 密	にじい橙 2.5YR6/4	ミガキ ナデ	SD 2
	火鉢	-	-	-	粗砂混入	にじい橙 5YR7/3	ミガキ ロクロナデ	SK 10
	火鉢	-	-	-	粗砂混入	赤橙 10R6/6	連続スランプ ミガキ	2-6
	火鉢	(224)	-	-	粗砂混入	赤橙 10R6/6	連続スランプ ミガキ	SD 4
	桶木鉢	(178)	92	132	致 密	黑 N 2	ロクロナデ 回転糸切り 底部穿孔	SK 10
第 1 類	桶木鉢	(178)	-	-	致 密	黑 N 2	ロクロナデ	SE 35
	豆	208	-	-	粗砂混入	灰 7.5Y4/1	研磨 刻線文[+]	SD 2
	豆	180	-	-	粗砂混入	オーリーブ灰 7.5Y3/1	鍵状タキシ 押压痕	SD 2
	豆	(650)	-	-	粗砂混入	灰 7.5Y4/1	鍵状タキシ ナデ 押压痕	SD 2
	豆	368	-	-	粗砂混入	灰 7.5Y4/1	研磨 押压痕 刻線文[+]	SD 2
第 2 類	豆	(400)	-	-	粗砂混入	灰 N 5	鍵状タキシ 押压痕	SE 35
	豆	-	-	-	粗砂混入	灰 N 5	鍵状タキシ 押压痕 漆による接合痕	SD 1
	豆	-	-	-	粗砂混入	灰 N 5	鍵状タキシ ナデ 底部砂目	2-10
	豆	-	-	-	粗砂混入	灰 N 5	鍵状タキシ ナデ 押压痕	1-1
	豆	-	-	-	致 密	灰 N 5	鍵状タキシ ナデ	3-9
	豆	-	-	-	致 密	赤黒 2.5YR1.7	鍵状タキシ ナデ	SE 35
	豆	-	-	-	粗砂混入	灰 N 4	鍵状タキシ 押压痕	SD 2
	豆	(94)	-	-	致 密	増青灰 5B3	ロクロナデ 指頭帆 静止糸切り	SD 2
第 4 類	罐	-	-	-	粗砂混入	灰 N 6	2cmで8本の節目 口縁端部波状文	SK 31
	罐	-	-	-	粗砂混入	灰 N 4	2cmで8本の節目 口縁端部波状文	SK 33
	罐	(336)	-	-	粗砂混入	暗灰 N 3	2cmで8本の節目 口縁端部波状文	SD 1
	罐	(334)	-	-	粗砂混入	赤褐 7.5YR6/1	2cmで8本の節目 口縁端部波状文	SE 38
	罐	(120)	-	-	粗砂混入	灰 N 6/1	2cmで12本の節目	10-4
	罐	(104)	-	-	粗砂混入	灰 N 5	ロクロナデ 静止糸切り	2-6
	罐	(150)	-	-	粗砂混入	灰 5Y6/1	2cmで8本の節目 沈目摩滅	SK 50
	罐	(108)	-	-	粗砂混入	灰 N 5	2cmで7本の節目 静止糸切り	SK 53
	罐	(108)	-	-	粗砂混入	灰 10Y4/1	2cmで8本の節目 静止糸切り	SD 1
	豆	125	160	280	粗砂混入	黑褐 5YR2/1	口縁部ロクロナデ ナデ 灰かぶり	SD 2
第 14 類	豆	(156)	-	-	粗砂混入	にじい橙 5YR6/4	口縁部ロクロナデ 灰かぶり	5-6
	豆	(120)	-	-	致 密	灰黄 2.5Y7/2	口縁部ロクロナデ 灰かぶり	SD 2
	豆	-	-	-	粗砂混入	暗赤褐 2.5YR3/2	ナデ	2-11
	豆	-	-	-	粗砂混入	にじい橙 5YR6/4	ロクロナデ ナデ	1-13
	豆	-	-	-	粗砂混入	にじい赤褐 5YR4/3	押印[木]格子目 漆による接合痕	3-4
	豆	(134)	-	-	粗砂混入	にじい赤褐 5YR5/3	縦方向のケズリ ロクロナデ 指頭帆	SE 37
第 15 類	豆	(200)	-	-	粗砂混入	灰褐 7.5YR4/2	ロクロナデ ナデ 底部砂目	SK 53
	豆	(200)	-	-	致 密	暗赤褐 2.5YR3/2	縦方向のケズリ ナデ 自然輪付着	2-4
	罐	(142)	-	-	粗砂混入	にじい橙 7.5YR7/3	2.3cmで8本の節目 ロクロナデ	5-6
	罐	-	-	-	粗砂混入	にじい橙 5YR6/4	2.6cmで8本の節目 ロクロナデ	SE 37
	罐	(340)	-	-	致 密	灰白 10YR8/2	3.3cmで10本の節目 ロクロナデ	10-9
	罐	(130)	-	-	致 密	赤 10YR5/8	2cmで8本の節目 回転糸切り	4-5
	罐	-	-	-	致 密	赤 10YR5/8	2cmで8本の節目 回転糸切り	2-7

表-2 出土陶器類観察表(2)

序 番 号	器 種	計 漢 鉢 (mm)			色 調		特 徴	出土地点		
		口 径	底 径	器 高	無	露	熱	土		
第 16	盆	-	162	-	浅黄	7.5Y7/3	灰白	5Y7/1	灰胎 内底に印花押印	SD1
	盆	-	(65)	-	灰白	10Y7/2	灰白	5Y7/1	灰胎 内底に印花押印	3-10
	盆	-	(59)	-	灰白	10Y7/2	灰白	5Y7/1	灰胎 内底に印花押印	SE37
	盆	91	52	23	浅黄	5Y8/3	灰白	2.5Y8/1	灰胎 内底に印花押印 他のによる接合痕	SD2
	盆	-	(72)	-	オリーブ灰	10Y6/2	灰黄	2.5Y7/2	灰胎 全面施釉 ガラス状の厚い胎膜つまり	SD5
	盆	-	(72)	-	灰白	10Y7/2	灰白	2.5Y8/1	灰胎 全面施釉 ガラス状の厚い胎膜つまり	X 0
	盆	(112)	58	26	浅黄	5Y8/2	灰黄	2.5Y8/1	灰胎 高台に3本の切り込み 2次火熱	SD1
	盆	-	-	-	灰白	7.5Y7/2	灰白	7.5Y8/1	灰胎	SD5
	盆	-	-	-	灰白	7.5Y7/2	灰白	5Y8/1	灰胎	1-10
	盆	-	-	-	浅黄	7.5Y7/3	灰白	5Y7/2	灰胎	2-9
第 17	盆	(110)	-	-	灰白	10Y7/1	灰黄	2.5Y6/1	灰胎 口縁内面に1条の沈線	X 0
	盆	(102)	-	-	灰白	7.5Y7/2	灰黄	2.5Y7/2	灰胎 白濁	SD2
	茶入れ	-	(34)	-	灰白	10Y7/1	灰	5Y6/1	灰胎 茶都直胎 照板系切り	SD1
	瓶子	-	(114)	-	灰白	10Y7/2	灰白	7.5Y7/1	灰胎 脚下部直胎 2次火熱	SK20
	瓶	(56)	120	28	灰白	10Y7/2	灰白	5Y7/1	灰胎 4条の波状文 平行比較 2次火熱	SD 2
	瓶底	48	-	-	灰白	7.5Y7/2	灰	N 6	灰胎 陶崩れ 2次火熱	SD 2
	脚皿	(234)	(236)	68	浅黄	7.5Y7/3	灰白	2.5Y7/1	灰胎 内外面体部下平置胎 内底櫛目	2-4
	盤	-	(150)	-	オリーブ灰	10Y6/2	灰白	2.5Y8/2	灰胎 外面施胎 三足盤	SE57
	碗	(116)	-	-	赤土	2.5YR4/2	明灰胎	7.5Y7/1	灰胎 外面体部下平置胎 口縁部外反	SD 9
	碗	(124)	-	-	にぼい青赤	2.5YR4/3	浅黄胎	7.5Y8R3/3	铁胎 外面体部下平置胎 口縁部外反	SE37
第 18	碗	(116)	-	-	赤土	7.5R1/1	灰白	10Y7/1	铁胎 口縫部外反	SK33
	碗	(122)	-	-	暗褐色	5YR3/3	明褐胎	7.5Y7/1	铁胎 口縫部直立	SD 4
	碗	(107)	-	-	黑褐	10YR2/2	灰白	7.5Y8/1	铁胎 口縫部外反	4-3
	碗	(123)	-	-	黑	10YR1.7/1	灰白	10YR7/1	铁胎	SK36
	碗	-	-	-	黑	10YR2/1	灰白	10YR7/1	铁胎	11-4
	碗	-	-	-	黑	10YR2/1	灰白	2.5Y6/1	铁胎	X 0
	碗	-	48	-	黑	10YR1.7/1	灰	5Y6/1	铁胎 台脚直胎	SE41
	碗	(98)	(54)	30	褐	7.5YR4/4	灰	10Y7/1	铁胎 内外面口縫部施胎 回転系切り	SK50
	花瓶	-	(64)	-	にぼい青赤	5YR5/3	灰白	10YR2/1	铁胎 下部直胎 回転系切り	11-5
	水槽	-	(122)	-	赤土	7.5R1.7/1	灰白	2.5Y7/1	铁胎 下部直胎 回転系切り	4-6
第 19	盆	(234)	-	-	オリーブ	5Y5/4	灰	5Y6/1	内面に菊花状模文	SD 2
	盤	(340)	-	-	モザイク	7.5Y7/3	灰	7.5Y8/1	内面に菊花状模文	SD 2
	碗	(142)	-	-	緑灰	7.5G5/1	灰白	N 7	無文 口縫部薄	SD 1
	碗	(142)	-	-	澤川灰	10GY7.2/1.5	灰白	N 8	無文	3-8
	碗	(137)	-	-	明緑灰	7.5GY7/1	灰白	7.5Y7/1	無文 口縫部外反	SK39
	碗	(148)	-	-	明緑灰	7.5GY7/1	灰白	7.5Y7/1	無文 玉縁状口縫	SD 1
	碗	(158)	-	-	白	2.5G2/5	灰白	7.5Y7/1	無文 玉縁状口縫	SD 2
	碗	(162)	-	-	明緑灰	7.5GY7/1	灰	7.5Y6/1	無文 玉縁状口縫	SD 2
	碗	(166)	-	-	澤川灰	10GY7.2/1.5	灰白	2.5Y8/1	無文 口縫部外反	SE38
	碗	(152)	-	-	澤川灰	10GY7.2/1.5	灰白	N 8	蓮弁文 線彫の単位文	5-9
第 20	碗	(150)	-	-	澤川灰	10GY7.2/1.5	灰白	N 7/1	蓮弁文 線彫の単位文 勾切れ	SD 2
	碗	(145)	-	-	澤川灰	10GY7.2/1.5	灰	7.5Y6/1	蓮弁文 線彫の単位文 勾切れ	SE38
	碗	(146)	-	-	翠灰	5GY6/1	オリーブ灰2.5GY6/1	蓮弁文 線彫の単位文	10-6	
	碗	(125)	-	-	澤川灰	10GY7.2/1.5	灰白	N 8	細麗文	45-8
	碗	-	58	-	澤川灰	10GY7.2/1.5	灰	7.5Y5/1	細麗文	10-7
	碗	-	-	-	オリーブ灰	10Y6/2	灰白	N 8	蓮弁文 線彫の単位文	3-9
	碗	-	-	-	明緑灰	10GY7/1	灰白	7.5Y7/1	細麗文	3-9
	碗	-	-	-	山鳴	5GY5/1.5	灰	N 6	細麗文 白濁	SP49
	碗	-	-	-	澤川灰	10GY7.2/1.5	灰白	2.5Y8/1	細麗文	4-5
	碗	-	54	-	明緑灰	10GY7/1	灰白	N 7/1	細麗文 内底刻文 高台内腹彌取り	SD 2
第 21	碗	-	(60)	-	翠灰	5GY6/1	灰白	5Y8/1	高台内腹彌取り	SD 2
	碗	(148)	-	-	澤川灰	10GY7.2/1.5	灰	7.5Y5/1	雷文帯 内底刻文	SD 2
	碗	(123)	-	-	明緑灰	5GY7/1	灰白	N 8	玉縁状口縫	SE41
	碗	(124)	(56)	31	翠灰	7.5G6/1	灰	7.5Y6/1	複花割文 高台内腹彌取り	SE41
	碗	(127)	-	-	にぼい青	2.5Y6/3	黄灰	2.5Y6/1	複花割文 勾切れ	2-9
	碗	(130)	-	-	御召茶	2.5GY5/2	灰	7.5Y5/1	複花割文	SE41
	碗	(122)	-	-	翠灰	7.5GY5/1	灰	N 5	複花割文	X 0
	碗	-	(44)	-	オリーブ灰	5GY5/1	灰白	2.5YR5/2	内底 付付 高台内腹彌取り	3-9
	碗	-	-	-	澤川灰	10GY7.2/1.5	灰白	N 8	高台書文帯 内底刻文	4-6

表-3 出土陶器観察表(3)

辨 別 番 号	器 種	計測 値 (mm)			色	調	胎	土	特 徴	出土地点
		口 徑	底 径	高						
第 8	白	160	—	—	灰白	16Y7/1	灰白	5Y7/1	唇部露胎 物切れ 薄による接着	X 0
	白	117	—	—	白	N9.5	灰白	N8/0	物切れ 口縁部外反	SD 3
	白	114	—	—	灰白	S8/1	灰白	5Y7/1	物切れ 口縁部外反	X 0
	白	112	—	—	白	N9.5	灰白	N8/0	物切れ 口縁部外反	3-8
	白	90	46	29	白	N9.5	灰白	N8/0	内底 外面下半露胎	3-8
	白	106	64	25	白	N9.5	灰白	N8/0	墨付露胎 物切れ	SD 3
	白	96	—	—	白	N9.5	灰白	N8/0	体部下半肥厚 2次火熱	3-6
	白	—	—	—	白	N9.5	灰白	N8/0	口縁部内部へ引き出す	5-11
	白	—	—	—	白	N9.5	灰白	N8/0	口縁部外反 2次火熱	SD 3
	白	98	36	28	灰白	10Y8/1	灰白	N8/0	体部下半 底部露胎	SD 2
	白	90	50	20	灰白	10YR8/1	灰白	7.5Y8/1	内底自流 扱り高台	SD 1
	白	92	44	25	灰白	2.5Y8/1	灰白	10YR8/2	内底自流 扱り高台 2次火熱	SD 2
	白	—	47	—	灰白	2.5Y8/1	灰白	N8/0	内底自流 扱り高台 体部下半肥厚	SK15
第 19	淡	124	—	—	淡青白	灰白	N8/0	口縁部界線 体部外側被草文	4-8	
	淡	124	—	—	淡青白	灰白	N8/0	口縁部界線 体部外側被草文	SD 2	
	淡	—	—	—	淡青白	灰白	N8/0	口縁部界線 虹鱗被草文(?)	3-5	
	淡	—	(68)	—	淡青白	灰白	N8/1	体部外側被草文(?) 腹部界線	SD 1	
	淡	—	(48)	—	淡青白	灰白	N8/0	見込半周文 腹部界線 物切れ	4-9	
	淡	104	—	—	淡青白	灰白	N8/0	口縁部界線 体部外側牡丹唐草文	5-6	
	淡	106	—	—	淡青白	灰白	N8/0	口縁部界線 体部外側牡丹唐草文	SD 3	
	淡	—	(78)	—	淡青白	灰白	N8/0	見込玉取瓣子 体部外側牡丹唐草文	4-5	
	淡	114	(62)	30	淡青白	灰白	N8/0	体部外側牡丹唐草文 腹部界線	2-12	
	淡	—	(58)	—	明暗灰	10GY8/1	灰白	5V8/1	藤原庭 見込〔壽〕	11-7
	淡	—	(68)	—	接青白	灰白	N8/0	見込玉取瓣子 体部外側牡丹唐草文	SD 3	
	淡	(97)	47	23	接青白	灰白	N8/0	見込十字花文 体部外側牡丹唐草文	SD 2	
	淡	—	—	—	接青白	灰白	N8/0	口縁部内側四方摩文	3-8	
第 27	村	—	—	—	接青白	灰白	N8/0	見込十字花文 体部外側牡丹唐草文	SE35	
	村	—	—	—	接青白	灰白	N8/0	口縁部界線 体部外側牡丹唐草文	2-11	
	村	—	—	—	接青白	灰白	N8/0	口縁部内側西方摩文 体部外側牡丹唐草文	2-10	
	村	—	—	—	接青白	灰白	N8/0	口縁部界線 体部外側牡丹唐草文	3-6	
	村	—	—	—	接青白	灰白	N8/0	口縁部界線 体部外側牡丹唐草文	SD 2	
	村	—	—	—	接青白	灰白	N8/0	口縁部内側四方摩文	3-8	
	村	—	—	—	接青白	灰白	N8/0	見込十字花文 体部外側牡丹唐草文	SE35	
	村	—	—	—	接青白	灰白	N8/0	口縁部界線 体部外側牡丹唐草文	2-11	
	村	—	—	—	接青白	灰白	N8/0	口縁部内側西方摩文 体部外側牡丹唐草文	2-10	
	村	—	—	—	接青白	灰白	N8/0	口縁部界線 体部外側牡丹唐草文	3-6	
	村	—	—	—	接青白	灰白	N8/0	口縁部界線 体部外側牡丹唐草文	SD 2	

表-4 出土土・石製品観察表

辨 別 番 号	種 別	計測 値 (mm)			出土地点
		長	横	厚	
第 9	砥	87	40	10	SE35
	砥	77	36	25	SD2
	砥	70	45	20	SK39
	砥	60	35	15	SD 2
	砥	35	22	16	SD 2
	砥	—	—	—	—
	砥	—	—	—	—
	砥	—	—	—	—
	砥	—	—	—	—
	砥	—	—	—	—
	砥	—	—	—	—
	砥	—	—	—	—
	砥	—	—	—	—
第 14	磨 羽 口	104	25	16	SD 2
	磨 羽 口	66	92	20	SD 2
	磨 羽 口	—	—	—	—
	磨 羽 口	—	—	—	—
	磨 羽 口	—	—	—	—
	磨 羽 口	—	—	—	—
	磨 羽 口	—	—	—	—
	磨 羽 口	—	—	—	—
	磨 羽 口	—	—	—	—
	磨 羽 口	—	—	—	—
	磨 羽 口	—	—	—	—
	磨 羽 口	—	—	—	—
	磨 羽 口	—	—	—	—
第 21	茶臼(上)	—	—	(12)	SD 2
	茶臼(下)	—	—	(91)	1-12
	茶臼(下)	—	—	(57)	1-12
	茶臼(下)	(188)	(300)	93	3-9
	茶臼(下)	(170)	(280)	100	SD 2
	茶臼(下)	—	—	—	—
	茶臼(下)	—	—	—	—
	茶臼(下)	—	—	—	—
	茶臼(下)	—	—	—	—
第 21	石 鋸	(260)	(80)	107	SD 1
	石 鋸	(300)	(124)	100	SK 3
	石 鋸	(270)	—	—	10-2
	石 鋸	(290)	—	—	6-13
	石 鋸	—	—	—	—
	石 鋸	—	—	—	—
	石 鋸	—	—	—	—
	石 鋸	—	—	—	—
	石 鋸	—	—	—	—

表-5 出土金属製品観察表

辨 別 番 号	種 別	計測 値 (mm)			出土地点
		長	横	厚	
1	刀 子	(125)	15	6	SD 2
2	刀 子	(148)	21	6	SD 2
3	刀 子	215	15	6	SD 1
4	鍼	(110)	—	3	SD 2
5	斧	(198)	15	2	SD 2
6	斧	170	12	6	SD 2
7	釘	96	7	5	SD 2

表-6 出土木製品観察表

番号	器種	計測値 (mm)			備考	出土地点
		口径	底径	器高		
第27	漆器椀	—	72	—	黒漆地に朱漆による草花模様	SD2
	漆器椀	—	60	—	内外面黒漆 見込に朱漆による桐模様	SD2
	漆器椀	—	70	—	内面朱漆 高台内黒漆に朱漆で「○」を描く	SD2
	漆器椀	(148)	—	45	内面朱漆 外面黒漆に朱漆による草花模様	SD1
	漆器椀	—	75	—	内外面朱漆 高台内黒漆に朱漆で「○」を描く	SD2
	漆器椀	—	76	—	内外面黒漆 見込に朱漆による草花模様	SK27
	漆器皿	92	62	25	内外面黒漆 外面に朱漆による花文状模様	SD2
	漆器鉢	(30)	—	—	内外面黒漆 内面に朱漆による家文状模様	SD2
	漆器皿	93	56	23	内外面黒漆	SK27
	漆器皿	94	62	23	内外面黒漆	SK27
図	長 幅 厚					
	11 不明	109	109	6	中央に径10mmの穴を穿孔 斷り板を乗せる	SD2
第3	12 不明	109	109	5	中央に径10mmの穴を穿孔 12と同型か	SD2
	1 曲物	(185) (80)	10	8	桜皮による止め具、桜目	SD2
	2 曲物	(168) (49)	8	8	桜目	SD2
	3 曲物	(95) (44)	8	8	板目	SD2
	4 著	(210)	7	5	6角に面取り、端部欠損	SD2
	5 著	220	7	5	6角に面取り、完形	SD2
	6 著	243	7	5	6角に面取り、完形	SD2
	7 瓢	252	80	6	板目、完形	SD2
	8 不明	65	73	6	両面に墨痕、内容不明、転用材か	SD1
	9 人形	(88)	22	2	桜目、一部欠損	SD2
図	10 魔型	(142)	27	16	粗糲な削り加工、板目	SD2
	11 呪符	(146)	22	2	上部欠損、桜目「(圖)明王」、梵字	SD2
	12 呪符	(185)	32	3	下部欠損、桜目、両面墨書き、内容不明	SD2
	13 呪符	219	27	2	完形、板目、「(圖)民将来子孫也」カ	SD2

表-7 出土銭貨一覧表

番号	銭種	初跡年 [西暦]		出土地点
		開	元	
15	開元通宝	唐	武德4年 [621]	SD2
16	開元通宝	唐	武德4年 [621]	SD2
17	開元通宝	唐	武德4年 [621]	SD2
18	開元通宝	唐	武德4年 [621]	X 0
19	開元通宝	唐	武德4年 [621]	X 0
20	天聖元宝	北宋	天聖元年 [1023]	SD2
21	皇宋通宝	北宋	元祐2年 [1039]	X 0
22	政和通宝	北宋	政和元年 [1068]	SD1
23	元豐通宝	北宋	元豐元年 [1078]	SD2

番号	銭種	初跡年 [西暦]		出土地点
		開	元	
24	元豐通宝	北宋	元豐元年 [1078]	SD2
25	元祐通宝	北宋	元祐元年 [1086]	SD2
26	元祐通宝	北宋	元祐元年 [1086]	SD2
27	聖宋通宝	宋	聖宋3年 [1091]	SD2
28	崇武通宝	明	崇武元年 [1368]	SD2
29	永樂通宝	明	永樂6年 [1408]	SD2
30	永樂通宝	明	永樂6年 [1408]	SD2
31	永樂通宝	明	永樂6年 [1408]	SE37
32	不 明			SD1

表-8 出土遺物点数表

器種	赤陥上部	かわらけ	瓦	器	珠洲系陶器		越前焼	瀬戸焼	青磁	白磁	青白磁	染付	計	
					鉢	碗								
縹	5	2	18	10	65	35	22	54	8	1	5	225		
調	1	1	2	2	12	11	6	4	4	0	4	47		
井 戸 縷	1	0	3	3	32	14	9	14	10	0	2	88		
土 壁	1	1	4	4	15	8	9	5	3	0	1	51		
桂 穴	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1	1	
小 計	8	4	27	19	124	68	46	77	26	1	12	412		
込 合 縷	6	0	9	19	71	95	50	49	20	0	23	342		
合 計	14	4	36	38	195	163	96	125	46	1	35	724		

表-9 器種別遺物点数表

器種	瓦				珠洲系陶器				越前焼				
	碗	火鉢	風炉	櫃木鉢	不明	盃	甕	擂鉢	その他	盃	甕	擂鉢	その他
1	7	9	8	13	7	157	24	0	7	132	24	0	
瀬 戸 縷													
茶 茶	53	30	20	32	3	29	9	33	44	2	8	27	
13													

V まとめ

1 造構について

今次調査において検出した造構には、堀跡・井戸跡・溝跡・土壙・柱穴がある。中でも堀跡に関しては、現存する東側と第3次調査で一部検出された南側を除いて不明であり、藤島城跡の縄張りのみならず本丸の規模さえ不明瞭であったことから、興味深い資料が得られることになった。SD1・2堀跡は本丸の北側にあたる堀跡で、この堀跡の検出によって本丸の南北の長さを推定するに至った。つまり第3次調査で検出した南側堀跡と、現存する土壙の在り方から、土壙を含む堀の内部は南北約90m(約50間)と考えられるのである。さらに本年10月に行った分布調査の結果、西側の堀跡と考えられる落ち込みを確認したことにより東西約95m(約53間)と推定された。したがって藤島城跡の本丸は幾分東西に長い方形を呈すると考えられるのである。またSD2堀跡はさらに西側へ延びることが考えられ、二の丸を構成するものと思われる。SD2堀跡で検出された小口はこれまで知られていないかった施設を確認したことになる。門柱と考えられる柱間の距離は5.4m(約3間)であり、土構状の張り出しも同規模と推定される。堀跡の周囲は部分的な調査結果に頼るほかないが、柱穴・土壙等北側調査区に数多く見られた造構はほとんど見られず、城の構造の一端を伺わせる。一方堀跡の北で検出した5条の溝跡は、今回検出された堀を掘削した時にそのほとんどが埋められていると考えられ、城の施設が最終的な形になる以前に存在したものと考えられる。

次に井戸跡であるが、今次調査で検出した6基と第2次調査の5基を合わせてこれまでに11基の井戸跡が検出されている。その中で縦板の井戸枠を遺存するものは5基である。残る6基の構造は不明であるが、共通して井戸底から茅の束を検出している。基本構造は、縦板に横桟の組合せであろうと推定される。これらの覆土には掘り方と井戸内の土質に差異が認められないことから、廃棄後にある程度の部材を回収し埋め戻したものと考えられる。なお今次調査で検出した中では、井戸枠の遺存度や覆土の状態からもSE37が最後まで機能していたものと考えられる。

土壙及び柱穴には多いもので3~4回の重複が認められる。新旧の間には第2次調査で見られた様な整地層を有したものと思われるが、今回の調査では北側調査区の一部で確認できただけで他は破壊されたものと考えられる。したがって上層の造構は、深く掘削され下層に達したものしか検出できなかった。柱穴は全体的に小規模で、度重なる改築は行われたと推測されるが、大形の建物を構成するものとは考えられない。

これらの造構は、城の拡張・整備の度に掘削あるいは埋められた造構が数多く存在するものと考えられる。部分的な調査のため全体の把握は困難であるが、上記の様な造構の在り方は安倍親任の『筆濃餘理』に記載された藤島城図のようにこれまで考えられてきたものとは若干の相違が生じるため、今後藤島城跡の縄張りを含めた検討が必要と考えられる。

2 遺物について

今次調査で得られた遺物は陶磁器類、木製品、金属製品、石製品等である。特に中心となつた遺構が堀跡のため復元可能な陶磁器類が多かったことと、多量の木製品が出土したことが特徴付けられる。陶磁器類では、これまでの調査と同様に、例外なく珠洲系陶器が多いことが指摘できる。珠洲系陶器は、壺に見られる口縁部の作り、体部の張り、研磨、叩打等の特徴や、壺鉢に見られる様な口縁部内端面の加飾法等から珠洲編年の第V期(15世紀初～中頃)のものが主流を占めると考えられる。しかし壺については、口縁部の作りや肩部の張りから、より第IV期(14～15世紀)に近い特徴が見いだせる。また今回第I期(12世紀中～13世紀)まで逆上する可能性をもつ壺も出土しており、藤島城成立以前の構築物の存在に新たな問題を提起している。越前窯陶器は、年代決定の良好な資料に恵まれないものの、壺・壺類や壺鉢の口縁部形態の特徴から越前編年のVIIないしVIII期(15世紀中～16世紀末)の範疇でとらえられると考えられる。一方瀬戸美濃窯陶器では、量的に少ない瓶子・梅瓶・花瓶・茶入れ等が、瀬戸編年のIV期(14世紀後～15世紀後)内に収まるものと考えられるが、大半を占める灰釉の皿や鉄釉の天目茶碗等は美濃編年の大窯I期(15世紀末～16世紀前)の所産と考えられる。

輸入陶磁の青磁・白磁・染付は出土陶磁器全体の27.5%、207点を数える。その中で青磁碗の占める割合は26.6%、55点である。青磁碗には細分すると、無文・蓮弁文・雷文帶蓮弁文がある。今次調査でも雷文帶蓮弁文碗の出土が3点と少なく、この碗と並行関係の可能性が強いと言われる片切彫りで単位文を形成する細蓮弁文碗の出土も少ないのが特徴的である。これに対し、線刻の細蓮弁文碗と稲花割花文皿が比較的まとまって見られるのは第2次調査の結果と同様である。したがって青磁碗・皿については、15世紀後半～16世紀中頃の所産と考えられる。白磁については、割高台の皿や端反の皿が主であり、碗が極めて少なく、第2次調査で見られた角環は認められない。白磁全体の出土量が少なく、器種も限られていることから一時的に移入したものと推測される。概ね青磁碗皿類の年代に並行するものと考えられる。染付については、碗の資料が少ないものの饅頭型心は無く、文様構成等から蓮子碗が多いと考えられる。皿は高台が付く内端反が主流である。これらは碗C・D群、皿B1群と呼ばれるもので15世紀後半～16世紀中頃の所産と考えられる。

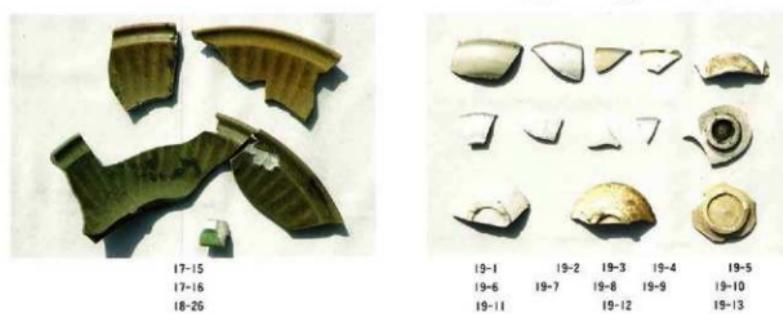
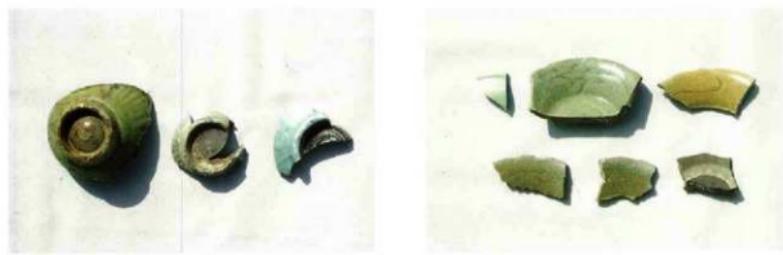
4次にわたる藤島城跡の遺物の在り方から、藤島城は15世紀から16世紀にかけて最も充実した時期があったものと考えられる。またSD1・2堀跡から出土した遺物をはじめ、2次火熱を受けたものが数多く認められ、焼失・再建を繰り返したことが伺える。それ以前の遺構は、これまでの調査では確認はできなかったが、須恵器を伴う時期や珠洲I期を伴う時期が存在したことは十分に考えられ、最終的な形での藤島城を知ると同時に現在知られる藤島城跡出現以前の遺跡存在をも問題として考えて行く必要を感じる。

引用・参考文献

- 小野正敏 1982 「16世紀の染付といくつかの問題」 島根県立博物館調査報告
植崎彰一他1985 「愛知県古墳跡分布調査報告(IV)」 愛知県教育委員会
志田原重人1986 「出土焼符にみる逐段焼の様相」 「草芦千軒 NO157」
吉岡康輔 1989 「日本窯域の土器・陶器」[中世編]」
吉岡康輔 1989 「珠洲の名陶」
北野隆光 1990 「15・16世紀の貿易陶器」 「貿易陶磁研究 NO10」 日本貿易陶磁研究会

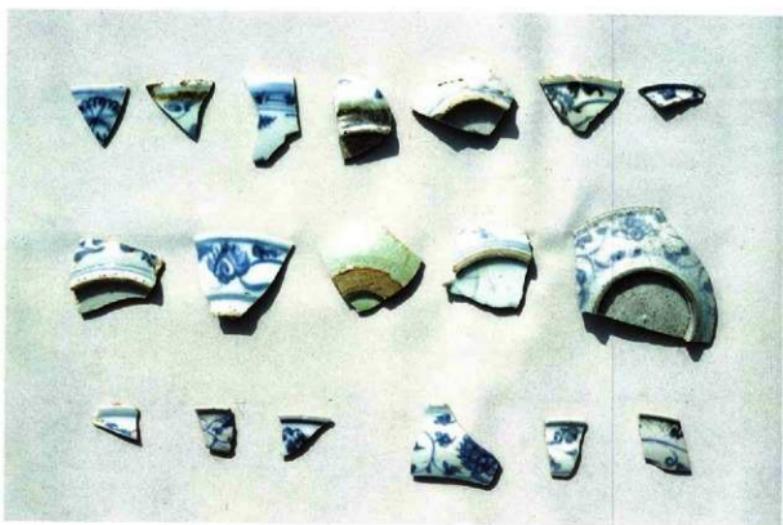
図 版

图版 1



青磁·白磁

図版2





調査区全景(西から)



調査區景(南東から)

図版4



堀跡トレンチ(北西から)



北側調査区造構検出状況(南から)



西侧調査区造構検出状況(南から)



東側調査区造構検出状況(南から)



北側調査区造構検出状況(西から)



北側調査区発掘状況(南から)



北側調査区発掘状況(西から)

図版6



SD1堀跡(南東から)



SD1堀跡(東から)



SD1内乱杭(北東から)



SD1内乱杭(南から)



SD1内珠洲系陶器出土状況



SD1堀跡(東から)



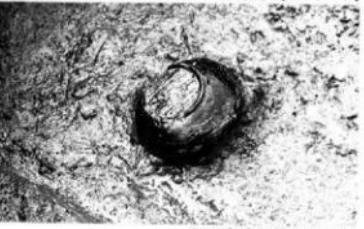
SD1堀跡(南から)



SD1内乱杭(西から)



SD1内乱杭(北西から)



SD1内漆器碗出土状況



SE35土層断面(南から)



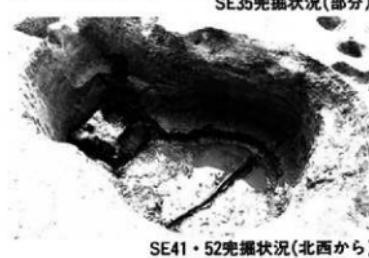
SE35宪掘状況(北から)



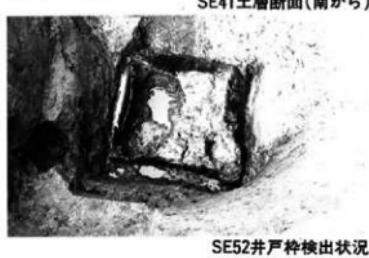
SE35宪掘状況(部分)



SE41土層断面(南から)



SE41・52宪掘状況(北西から)



SE52井戸枠検出状況



SE37土層断面(北から)



SE36宪掘状況(南から)



SE38土層断面(南から)



SE38宪掘状況(北西から)

図版8



SD 3・4・5・6・7 検出状況(東から)



SD 4 土層断面(西から)



SD 5 土層断面(西から)



SD 7 土層断面(西から)



SD 3・4・5・6・7 完掘状況(東から)



SK16 土層断面(南から)



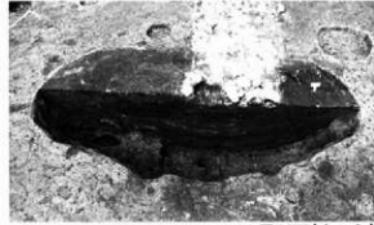
SK18 土層断面(南から)



SK22 土層断面(南から)



SK26 土層断面(南から)



SK27 土層断面(南から)



SK28 土層断面(南から)



SK30・31 土層断面(西から)



SK32・33・34 完掘状況(南から)

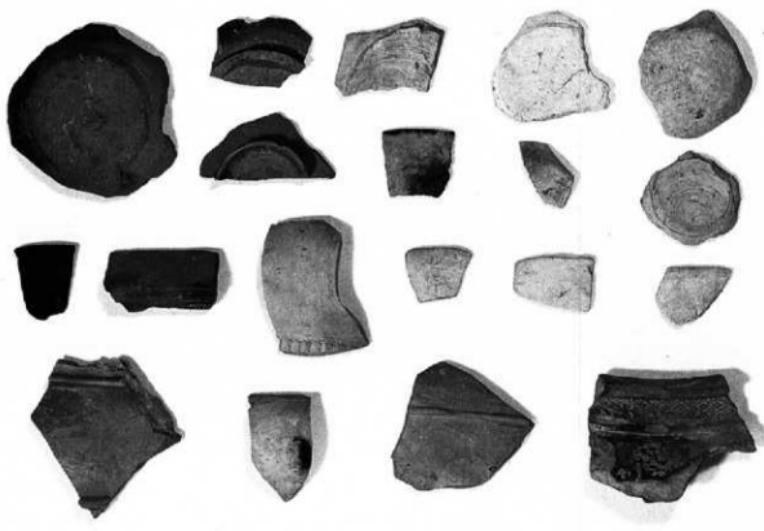


SK39 土層断面(南から)



SK42 土層断面(南から)

図版10



10-1

10-2

10-4

10-6

10-7

10-13

10-14

10-3

10-15

10-5

10-10

10-8

10-11

10-9

10-12

10-16

10-17

10-18

10-19



10-20



10-21

須恵器・かわらけ・瓦器



11-1



11-2



11-3

株洲系陶器(1)



12-1 刻線文「+」



12-1



12-1 刻線文「+」



12-2



12-3



12-4



12-5

珠洲系陶器(2)



12-6



12-7



12-8



13-2
13-5

13-3



13-4
13-6



13-7
13-9

13-8
13-10



13-7
13-9

13-8
13-10



14-1



14-2
14-3



14-4
14-5



14-6

越前焼(1)



15-1

15-2

15-3



15-4

15-7

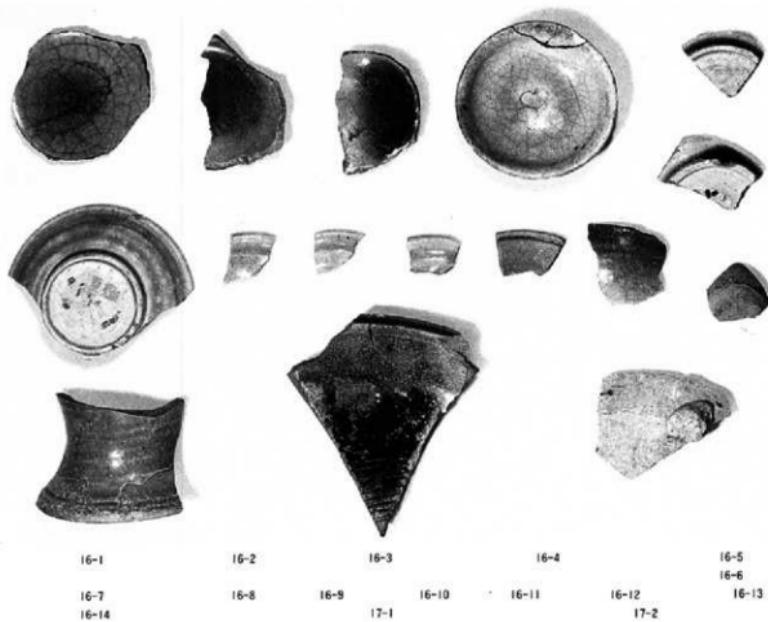
15-5

15-6

15-8

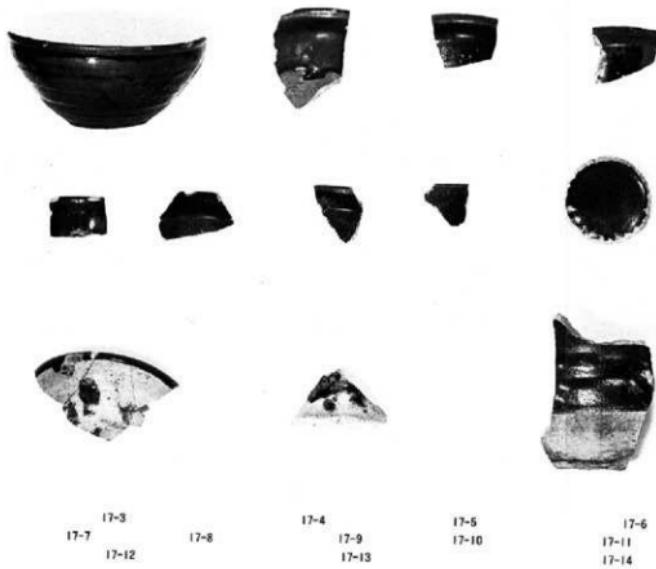
越前焼(2)

図版17

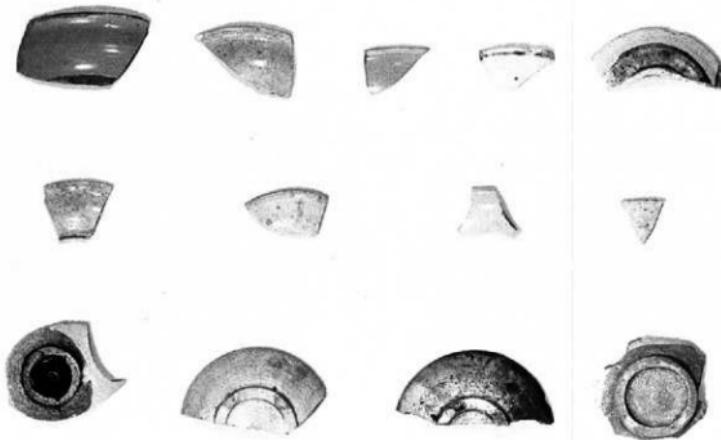


16-15

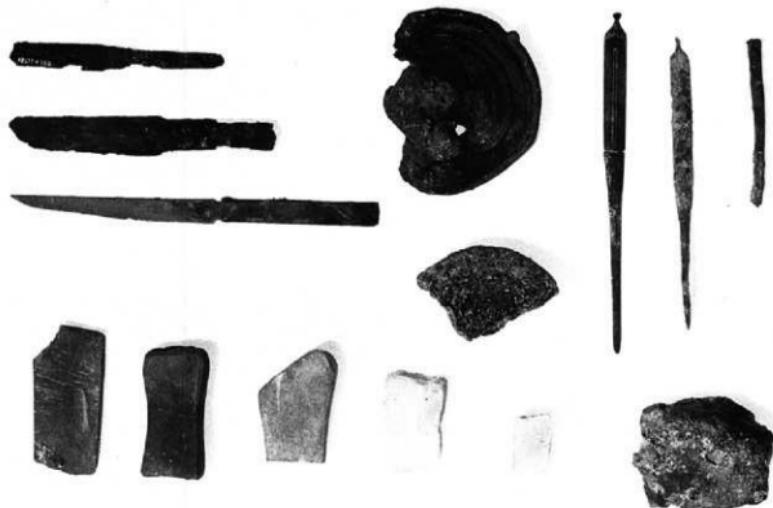
瀬戸焼(1)



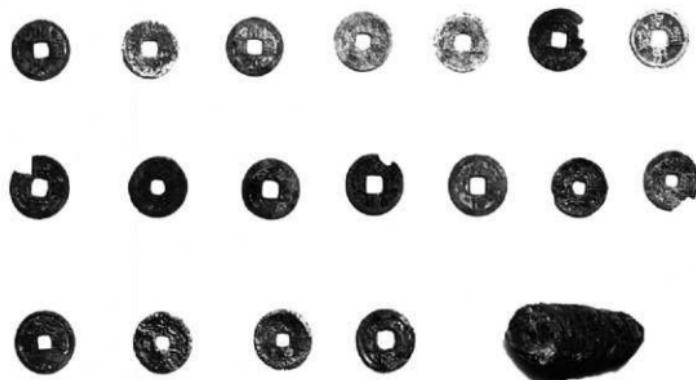
瀬戸焼(2)



白 磁



金屬・土・石製品



20-15 20-16 20-17 20-18 20-19 20-20 20-21
20-22 20-23 20-24 20-25 20-26 20-27 20-28
20-29 20-30 20-31 20-32

錢貨



21-1
21-4

21-2

21-3
21-5

茶白



21-6
21-8

21-7
21-9

石鉢



22-1

22-4

22-2

22-5

22-3

22-6



22-7

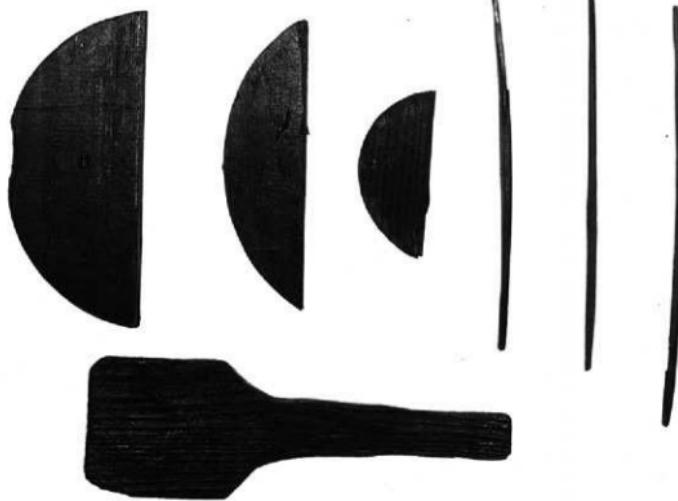
22-11

22-8

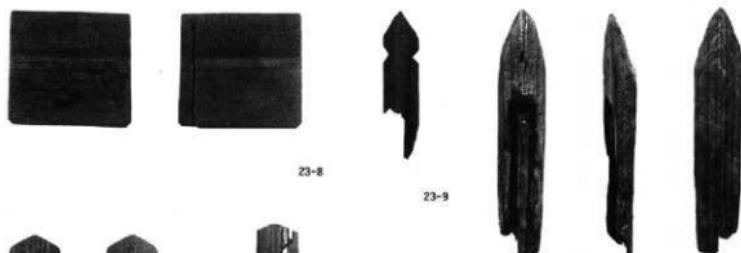
22-9

22-12

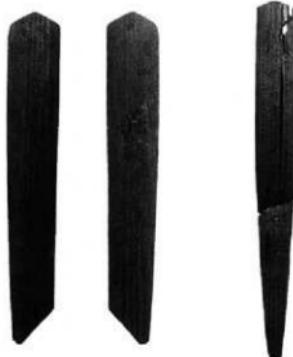
木製品(1)



23-1 23-2 23-3 23-4 23-5 23-6
23-7



23-8 23-9 23-10



23-12 23-13 23-14

「
民
將
來
子
孫
也
」



23-11 木製品(2)

山形県埋蔵文化財調査報告書第181集

ふじ
藤 島 城 跡

第4次発掘調査報告書

平成4年3月25日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 株式会社 田宮印刷
